

○岡崎の評判界 目下岡崎町に於ける評判は一は怪僧濱口熊嶽で一は落語圓頂とである熊嶽は大字魚野安養院にて毎日堂に溢る、計りの施術希望者を得つゝあるとして第一名前からして怖ろし相であるから各地の新聞で以て大攻撃した處の文だけ見ると如何にも悪黨でベストか虎列刺の様に思はれ否思ひつゝありたるが愈々岡崎町へ来て見ると實際無邪氣なまゝで大きな子供としか見えられない彼が劇場に観覧に出かけた時の行動や宿屋に居る時の消息を聞いて見ると表情の非常に發達した活潑な人間と言ふことが譯るゝので彼が變な衣服を着して施術を爲す際に如何にと見ると成程俗流を踏依させて餘りありじや故に岡崎町に入り込んでから数日ならずして安養院の御堂に溢るゝ計りの人間が集りたかりつゝあるのである無論見物人も多いてあるが兎もあれ目下岡崎町に入込をする場所でもつて大評判されつゝあるなり

三河新聞記事

(明治四十年十一月十七日)

○熊嶽の研究(一) 妖術師濱口熊嶽來つて其の術を行ふや手を觸れず痛を覺へずして齒は忽に抜け来るに歩行し能はざる豈は忽にして立ち歸るの不思議は喧々囂々巷説に高くして吾が岡崎の地は將に熊嶽の岡崎たらんとすと評するも敢て誇張に非らざるの狀態に有るのである豈に馬鹿々々しさの極みならずや記者は世に不思議ある事あるを知らざる者である面して又不思議なることに

子屋に滞在し眞言秘密の怪術を施し諸病患者を助くる爲めと揚言し居れり毎日患者に三百餘名來集し門前市を爲す有様なり此の怪術を施すを實見せし人の話に一旦秘法を結べば難病も全治し殊に齒痛ホクロ疣等は即座に抜き取り婦人の乳に乏しき者は眼前に於て乳汁を迸出せしむる等不可思議にして驚くの外なしと因に濱口熊嶽は近日半田に來るべしと云ふ

熊野新報記事

(明治三十九年八月二十一日)

○或人の熊嶽評 例の濱口熊嶽は常町油屋方にて眞言秘密の法とやらを行ふてゐる由なるが就ては一日同人を同所に訪ひしと云ふ或人は評して曰く「熊嶽は一人拾錢づゝの祈禱料を取つて得意の法を行ふてゐるのだが有難がつて集まる者には粗服あり綿服あり有髻あり無髻あり五分煎あり廂髪あり何れも眞面目に祈禱を受けて居る其の頭數一日ザット千人内外何んと驚くではないか」云て僕は今日の社會はマダ斯くも幼稚であるかとはすと共に畢竟するに彼れは社會の必要に投じて働いて居るのだから是を法律の力を以て無視しようとしたところ及ぶ可きではない幾分か其の度を狭うせしむるに過ぎないと斷定した云々

興參新聞記事

(明治四十年十一月廿二日)

逢着したる事も多いのである然るに再三彼が妖術を目撃し實に奇怪に堪ぬのである爾來記者は勉めて彼に接近し彼が一舉一動に注目し益々彼が奇怪極まる性行を有する人物たることを知つた然れども記者は未だ五里霧中に有るが如く彼が妖術に就て絶体的に信を措くものでない而して彼が術を絶体的に手品然とも信じるものでもない讀者よ記者は熊嶽に魅せられたるものとして暫く其の語る處を聞け然り記者は熊嶽に魅せられたのであるかも知れん斯くの如くにして記者は未だ熊嶽を論ずてふ一文を得んと欲して得る能はず爰に熊嶽の研究と題し不肖なる記者が觀察したるさまを演ぶると共に彼が妖術に對する疑問を讀者諸氏に訴へんとするのである

○熊嶽の研究(二) 熊嶽何者乎彼が明治十一年生(三十歳)奇抜なる山水を以て名ある紀伊の國の一寒村に生れたる一漁者の子のみ其の骨格其の容貌其の肉色は争ふ可からざる漁者たるの資格を有して居る彼れが性格の粗豪なるも漁者たるより來りしものであろう彼れが十餘歳にして那智山に入つて得度となつた那智に於ける彼れが歴史を知らざれども懸水千仞嶽角を怒撃し其の響き地軸を裂くが如き大衆の聲の下に立ちての苦行は妖僧か賣僧か之を知らざるも彼をして其の景色の如く平凡ならしめず彼をして其の山水の如く奇抜ならしめたのであらう記者が數年來屢々彼か名を知り其の術を聞きて徒らに愚夫愚婦を惑はす賣僧となしたるに西尾澤在中に於ける際にも大いに筆を把つて鞭撻を彼

れに加へたのである今日科學本位の學理上彼れが術の如き不思議は世にあり得べ可らざるを信じ居るからである然るに彼が終に吾が岡崎に來たるや直に本社を訪ひ語つて云ふ君の處の新聞は西尾に居る時分大分己れの悪口を書いた書いたは良いサけれども一度僕の術を見て呉れ見た上で大に悪口を云ふてくれと記者は諾して彼は歸つた日ならずして記者は彼の術を見た之を再び三たひした茲に一團の疑念は生し來たのである

○熊嶽研究(三) 何をか疑念と云ふ科學より言へば彼れが加持祈禱に似たる滑稽なる術が往々にして効果を奏し醫術に於て快愉する能はざる病患者さへ彼れが爲めに全く病苦を去るに至るの事實を演ずるからである記者は始め大なる疑念を以て彼れに對して居た然れ共其の疑念は或る程度まで了解せられ全く効果もなき孩子のみみててないと云ふ事を信じ又讀者諸氏に對し多少の責任を負ふて證言するまでに信じて來た最も彼れが術が人民自由術と自稱し居れとも其の名稱の如何は置いて科學上の誘を以て言へば催眠術に外ならぬのである其催眠術も彼れが大いなる經驗に今や神に入つて居るのである催眠術なるものが病患者に對し療養上の功ある事は既に讀者諸氏の知悉する處で今更言ふまでもない事である然して催眠術なるものは術者に最も自信を要し被術者に信仰を要し自信と信仰の結果は精神相感應し茲に科學上解析する能はざるの神妙なる事實を現出し來るのである彼れが天真爛漫なる性格、彼れが學識かくして非常に發達したる頭腦は偉大な

る自信力を有する人たらしめて居る而して彼れが僅々二三時間にして二百三百の被術者に對する
繁忙なる施術は並み居る被術者をして應接に追ふからしめ知らすく之を眩まし吾が術中のもの
とするに於て餘程巧みに出来てゐる

○熊嶽の研究(四) 記者が再三彼が性格に對し天真爛漫なる語を以てせり如何なる程度まで天真
爛漫なるか記者は信す恐らく彼れ程に極端なる天真爛漫の性行を有するものはあるまい
試みに彼れと一壺の酒を傾けよ數獻の酔ひ興に乗すれば制せんと欲して制する能はず起つて持氣
す恰も三歳の兒童が姨の手拍子に連れて踊り出づるに異ならぬ様を演ずるのを見る試みに寄席劇
場に行け彼れは興來たれば笑ひ禁せんと欲して禁する能はず大なる休軀を顧みず手を打足をもが
きキヤア〜と叫びて抱腹絶倒するを見る試みに彼れと座談せよ如何に談話の間が抜けて居るこ
とと罪の多い事とあどけないこと、而して吾が儘なることに驚くであらう又彼れが日々行爲を
見よ恰も兒童が一座に閑座する能はざるが如く寸暇あれば忽ちに自轉車を飛して東に西に何の目
的もなく駆け廻る實に彼は其の平常に於て眞似んと欲して眞似る能はず故意に爲さんと欲してあ
す能はず極端なる天真爛漫の性格を有して居るのである此の性格は彼をして勿体ぶるの人たらし
めず安養院に於て術を行ふ際の如き多くの被術者の面前に於て無頓着に裸体となり白衣と着替へ
或は日々數十金の収入を得つゝあるも尙綿衣綿服を纏ひて透幅を飾らず恰も窮措大の如き到底普

通の度を以て量るの人物に非ず兎に角彼は水平線上に一頭角を抜くの男である

○熊嶽の研究(五) 記者が今日までに見たる術者なるものは悉く面憎さまでに尊大で様子振つた
ものであつた尊大は即ち世人よりエラク見てもらわんがため要求から來たもので不自然極まつ
たものであるけれ共術者としての一要件とも信じて居た然るに熊嶽は全然之と異り其の用語こそ
尊大なるが如きも寧ろゾンザイ烈野なるのみにして其の行爲の總てに於て此の如き態度を見ず記
者が術者として必用と認めたる尊大は彼に於て何の必要も無いのである而して彼は常に云ふ己れ
を信仰したら來い然らざれば來るな彼れが形式上の尊大を纏ちて顧みず、精神上の信仰を最も必
要とするが如き無頓着なる性格の中に用意の周到なるを見るのである其の術者もものは唯白衣白
袴を着し座側なる金盃の水に唇を濡き患者の要部に注目しつゝ怪しき呪文を唱へ九字を切るのみ
しかも一分時を要するのみ然るに忽にして齒は脱し忽ちにして乳は進るの奇觀を演ず、若し無形
の精神上より來る痛痒を治するのみならば記者は敢て不思議と云はず已に催眠術の試むる處であ
るからである

三河新聞記事

(明治四十年十二月一日)

豊橋の參陽新報は熊嶽に訴へられてうろたへたものと見ゆ該事件につき事實を傳ふる本紙に對し

辯護の筆を弄するものだなと云ふて居る近來言論界の不謹慎なる事情の顛末を明らかにせずしてやれ苦言を呈すて候のとか方今の爲政者は一の成案なく又一定の方針なくなると盲目蛇に怖ぢざる筆を弄するものかうあらたりに轉つて居る、事實を事實として突張るからば實に見上げたものだ非事實なる事を指摘されながら悪たれ口をたたくまどとは其陋劣さ加減の深さがわからぬ由來穩健を以て聞へたる參陽新聞の爲に惜む

三遠新聞記事

(明治四十一年一月二十五日)

○濱口熊嶽師來る 眞言宗醍醐派東京分教會長權律師濱口熊嶽法師は活法と稱せらるゝの事にて到處眞言秘密の法を行ひ疾病患者を施術し如何なる難症も根治するとの事なるが今同當市に來り今廿五日より一週間神明町寶形院に於て毎日二百人を限り施術を行ふ由

名古屋新聞三遠附録記事

(明治四十一年一月二十五日)

○濱口熊嶽來る 奇物を以て天下に其の名を知られたる濱口熊嶽は此程蒲郡御油町を経て瀬戸町に至り施術中なりしが昨日其の兄弟分ある松旭齋天一を訪ねて來豊したるが都合に依り當地に於ても本日より例の施術治療を爲すべしと云ふ因に同人は此の程武徳會へ二十四又瀬戸神社へ二

十四寄附したりと

參陽新聞記事

(明治四十一年一月二十五日)

○濱口熊嶽來る 眞言秘密の法を修し諸病を治するてふ修驗者濱口熊嶽は此の頃まで尾州瀬戸にありしが一昨夜飄然として當地に來り船町壺屋旅館に宿泊せりとて昨日日本社に來り「濱口熊嶽の傳」公判始末記」と題する小冊子二部を寄せたり其の傳と云ふを見るに同人は明治十一年紀州長島なる漁家に生れ幼名を熊藏といひ七才にして小學校に入學せしも暇あれば聞覺への經文を誦し學課を勉めさりしかば八才にして退校を命ぜられ其の後靈夢を感じ十三才にして那智山に入りて垢離を取り實川上人に遇ひ師事すること三年明治二十六年紀州安食寺住職とある等小説的に面白く書綴りありたり又其の施術と云へるは九字を切り呪文を唱へ眞言秘密の法を行ひ疣黒子齧齒等は即座に拔さ取るとの事なり世間熊嶽を目するに妖僧を以てし愚民を惑はすものとなすもの多し然れ共施術の結果如何は實見の上に非んば輕々に評し難し今や催眠術は精神的疾病の治療に功ありと認められ又東京帝國大學教授たりし故ベルツ博士の如きも精神感通術を其の著書中に説かれしことあり眞言秘密は吾れ之を知らざるも我國往古より禁厭の法あるを見れば科學的昭昭のみを以て精神世界を論ずるは恐くは失當ならん、彼れの施術にして若し有効ならんと思ふは此等

の心理學應用ならん尙「公判始末昔」中馬關毎日新聞記者の間に對し「西談に曰く新聞の悪口は無代の廣告なり」云々と答へたる一説あり是れに依りて見れば彼れは相當の人格を具ふるが如きも新聞の記事に對し一面取消の掲載を求め同時に誹毀の訴へを起せる事ありしに見ればさまでの人物からざるが如し兎に角施術を實見の上更に讀者に報する事とすべし

豊橋新朝報記事

(明治四十一年一月廿五日)

○濱口熊嶽來る



熊嶽師二十二才ノ時

イボホクロ取りの名人奇人と世間に評判高き施術師濱口熊嶽師は一昨日來豊目下船町蘆屋旅館に投宿約一週間滞在別項廣告の如く寶形院に於て施術を爲す由

參陽新聞記事

(明治四十一年一月二十六日)

○濱口熊嶽の術 昨二十五日より別項廣告の如く當市神明町寶形院に於て午前七時より同十一時

まで受附一日二百人限り施術を爲す筈なり茲に掲ぐるは濱口熊嶽の小照彼の爛々たる眼光の如何に一癖ありげなるを見よ

豊橋新朝報記事

(明治四十一年一月廿六日)

昨日より市内神明町寶形院に於て向ふ一週間を限り眞言秘密の法ふかて疾病患者を施術する由いろくに噂されて兎に角も一個の變り者である

同日同新朝報記事

世界大魔術師の天一と奇術師の熊嶽とが云合はした様に我豊橋に來たのは實に奇觀だ天一は彌生座で觀客をアット叫はしめ熊嶽は寶形院の施術所で患者の荒膽を抜く處奇好個の對照であるのて熊嶽は本年三四月頃歐米漫遊の途に就くといふて居るが歐米よりは寧ろ清韓の地を跋渉して施術したら如何に

豊橋新朝報記事

(明治四十一年一月二十八日)

怪僧濱口熊嶽は今日市内の各新聞記者に施術の實況を見せると云ふて居るて其の實況を見た上て

△満室の群室 午前十一時を以て受附を停止せるが時に遅れて空しく歸りたるもの數十人受附數實に二百人之に前日までの患者にして日々來つて治を乞ふ者百餘名總數無慮六百人に及べり

△天一と天勝 黒地メルトンのトンビに毛皮の襟巻して金縁眼鏡を光らし火鉢を控へて座したるは奇術師松旭齋天一にして之れに隣りて風通御召のコートに黒きボアを着けたる大ハイカラ美人は同丈の嬖天勝嬢なり鳥の羽のボアを着けたる可憐の少女は天旭女とて外に三名の同座員あり天勝の織指に燦然たる光りを放てるは寶石入の指環にして其の數シカモ三つとは……

△阿三と阿濱 多田屋おさむ葛屋のおはま孰れも眞面目に施術を受けるを見たりされど遊治郎を惱殺する彼等の怪腕は想ふに眞言秘密以上ならむ

△白衣に白粉 施術師熊嶽は此の寒中に拘らず白衣一枚に白き袴をつけ傍に清水を満ちたる金盃を置きたるのみにて種もかく仕掛もかく患者に接して九字を切り呪文を唱へ叱咤大喝する聲も淡れて鬼氣人を襲ふものあり

△老婆の拜謝 常市下町杉田さむ(四十一)は關節リヨマチスにて四肢痲痛し十餘年間自ら帯を結ぶ能はざりし由あるが施術を受けるや兩手の上下屈伸自由にして兩手を背に合せ又頰部を撫ずるも心の儘なるに至り感喜に堪へず拜謝して去りたるはさもあるべし

△昏睡に陥る 若杉氏の令息芳次郎(十四)は先づ一喝の下に齶齒一本抜かれ尙鼻腔内に硬化せる

評を下すことせよ

參陽新聞記事

(明治四十一年一月二十八日)

○飛耳長目 一昨夜奇僧濱口熊嶽と會見して談偶譚毀告發事件に及んだ彼は辨じて曰く新聞紙の悪口は無料の廣告なりとは余の確信する處敢て妄に告發するが如き狹量に非ずと而かも昨冬貴社を告發したるも抑も該記事が夫婦間の愛情を割かん事を怖れ不止得の擧に出でし者希くは諒せよと△昔百萬の豪敵に恐れざりし森蘭丸初菊の前に兩手をつきし例あれば熊嶽が妻の前に本社を告發に及んだも無理ならじと追窮を止め話頭を轉じて笑聲中に葬つた彼れは一見氣の人て有つて眼光爛々体軀の偉大にして万衆を摺伏せしむべき相は儘に高山彦九郎的である

參陽新聞記事

(明治四十一年一月二十九日)

○濱口熊嶽の施術を見る(一) 妖僧と怪僧よと噂高き施術師濱口熊嶽去二十五日より當市神明町寶形院に於て一般病者の施術を爲すとの事なれば昨朝九時過ぎ一寸景況視察と出掛けたるが實に百聞一見に如かず強ちに學理的頭腦を以て判断すべきに非ずいさ當日の光景を略叙し其の施術に對し批評を加ふる事とせん

軟骨を除かんとて印を結び一喝して痛むかと云へば俄に堪へ難しと云ふ更に一喝して止まつたかと問へば微笑して然りと答ふ此の兒の施術は數日に渉る由にて眼を閉せと命ずれば力を極めて開かんとするも能はず許すと云はれて忽ち眼を開く又眠れと命ずれば忽ち昏睡状態に陥るが如き只施術師の命ずる儘にて殊に不思議なるは一三三と數へしめそれ止めたと云へば口を動かすも聲出す更に一喝して許すと云へば直に發聲するが如き尙一喝して吃になつたと命ずれば忽ち吃る滑稽には満場哄も笑聲の起れるも宜なり

△乳の噴出 常市新川町長谷川まつ(三十三)は左の乳紫色に腫れ上り疼痛堪へ難しと訴へ右の乳も痛んで乳汁出でずとの事なりしが施術を受ける事少時にして痛を忘れ尙右の乳房を撫で一喝して控りたるに乳汁泉の如く噴出せるは奇なりし

△齒と黒子と疣 齒は患部に手を觸れずして一喝して抜け去り更に呪文を唱へ口を開かしむれば隣の齒は移りて其の跡に入り見るく整列するが如き只術者の意の儘あり又黒子は呪文を唱へつ指頭にて摩擦すると再三にして直に消る跡には只皮膚の色が稍白く變せしむるを見る疣も亦同しく落ちて術者の指先に残り稍出血するも復呪文を唱へ忽ち出血を止むるを驚くべし

○濱口熊嶽の施術を見る(二) 肩掛に施術年の頃四十餘りに女房ラヅくと熊嶽の前に出て昨日の御言葉に依り病人の肩掛を以て参りましたと風呂敷とくく草色の肩掛を取り出すにオイ

餘り横げては不可パチルスが飛次出して他に傳染しては大變だと制しつゝ肩掛に向ひ九字を切り呪文を唱へサアこれで可し持つて歸れと又明日午前十時三十分には術をかけるると本人にいつて置け其の時刻に来ると屹度眠るからとやがて女を返しやりぬ

△天一と語る 此の時熊嶽天一を顧みて何處です以前々術が進んだでせう彼様に云ふて置けば其の時刻には屹度眠るから妙だ催眠術をかけないでやるのは妙だらうイヤ君の所へ患者を置いて僕は此處に居て眠らせて見るよハハハハ、何々大笑す

△チト三厘だね まだ未通らしき娘一寸した女振たるが母親に連れられて來つて施術を乞ふがあり年はいくつと問へは十九といふ若衆に威され足の先まで麻痺れた様な氣がしましてから胸が悪くかりましたと語る熊嶽は此の娘に向ひ例の一三三と數へしめ可矣術がかかつたと微笑しそれより發聲を止めたり又は胸に手をあてさせサア取れんぞ取つて見やと命ずれば娘耻かしげにハイ麻痺れて取れませんと云ふ次に立つことを止め歩むことを止め母親を顧りみ莞爾として屹度治るよ安心せよと慰めしが後を顧りみ小聲にてチト三厘だねは無遠慮すぎたりされと慥面なく思ふ事を言つて退け頓着せざる處淡白にて好し

△醫者へ往け 腫障眼肺病等にて術に利かぬ者と認むる時は一寸見たのみにてこれは不可ん私には治らんから醫者へ行けと命じ番號札を返し受け附より返金せしむ已れを知りて術はざる所赤裸

々にして氣に入つたり

△困りはせぬか 衣裳見すばらしき人又は雇人らしき者には何勝だ二拾五錢出して困る様な事は
あいか困るなら遠慮なく言へ錢は返と番號札に判を捺して差戻しこれも受附より返金せしむる程
の中には涙に呉れて感謝するものもあり満座の手前迷惑する者もありイエ困りませんとラヅ／＼
答ふるが如きチト無遠慮過ぎはせずやと思はれたれど貧者を恵む心は感ずべし

△鬱血見る／＼消ゆ 自轉車に轡かれしと云ふ四五才の小兒眼の縁薄黒くなり眼中赤く充血した
るがけた／＼ましく泣き叫ぶを母親が膝に抱きて施術を請ふ可全治し

○濱口熊嶽の施術を見る(三) 余か實見せる施術の實況は既記の如くなるが想ふに讀者の多くは
余の記事に疑ひを懐き眞實とせざる人もあるべし然れ共これ單り記者のみならず日々二百名の病
者が現に目撃する處にして當市神明町の寶形院に於ては何人も事實と信ずる能はざる奇觀の實現
せられつゝあるを如何にせん其醫師はいふこれ催眠術の一種にして人体に非常なる壓力を加へ
其の刹那に於て肉體の一部を貧血ならしめ他の一部に充血せしむるものならん然れ共黒子を抜き
去るが如きは粗織の浮き上がるに非らされば不可能の事にして要するに到底醫學上より論斷すべ
きにあらず寧ろ心理學上の研究を要すべきものなりと記者は醫學上の智識に對し全然門外漢なれ
ば此の奇怪なる施術を評すべき能力なく就ては之を濱に彼れ自身に問ふも學理の如何は知らずと

答ふるのみ更に要領を得ず又同人の語る處によれば空中を飛ぶ蜻蛉に向つて一喝すれば直に地上
に落ち來るも雀に向つて試みしに更に效驗なかりしとすれば彼れの施術も物により病により未だ
百發百中の域に至らざるや勿論なり七年前余が東都に在るの日に親友なる醫學生より聞きたること
あり曰く醫科大學教師ドクトルベルツは其の著書に於て精神感通術と云ふ事を説き人は熟練によ
り自己の精神を他の肉體に及ぼし不可思議なる現象を實現する事を得べしとて小説中に多く見る
處の武藝者の氣合の如きは熟練に依りて爲し得べきものと云へりと

○濱口熊嶽の施術を見る(四) 此の學生は精神感通術に付熱心に研究しつゝありしが同人は云ふ
書齋の窓より數十間の彼處なる木の葉を吹き動かすきは不可能なるが如きも日々試みて止まざれ
ば終に自由に吹き動かす事を得べく此の理に依りて猫でも鼠でも一喝の下に睨み落す事を得べく
想ふに熊嶽の術も此の精神感通術を熟練し其の技神に入りたるものなるべく其の齒を抜くが如き
呪文を唱へ一喝する刹那に一種靈妙なる力の電光石光の如く活動し病者をして些の疼痛をも感せ
しめざるには非らざるか心理學者は須らく研究すべき價値あらん

何にもせよ齧齒黒子疣の三種は一喝して直に抜け去り又胸病レウマチスの如き神經系統に屬する
病症には殊に特効あるが如く胃病肺病等内科に屬するものも一時は病苦を忘れしむる由なり又婦
人の乳房の腫れ上りて疼痛甚だしく乳の出ざるものを即座に痛を止め乳汁を出すか如き假令一時

的なりとも不可思議なる術には相違なし只多年の痼疾に對して有効ありや否やは疑問にして若し之れにも効ありとすれば世に醫師の必用なきに至るべけれど余は此の點に於ては容易に其の効力を認むる能はず兎角人は熟練の結果随分理外の理とも思はるゝ奇異のはなれ技を演じ得るものにして彼の輕業師綱渡り飛附等を演じ觀るものをして悚然戰慄せしめながら常人は寧ろ容易に演じつゝあるが如き畢竟熟練の結果に外ならざるあり余は濱口熊嶽の施術を見ても之を法力に歸せんよりは熟練の結果靈妙の域に到達せるものと斷ずるの至當あるを感ずれば世の識者に向つても妖術として妄に排斥すること無く學理上より充分の研究あらんことを切望するものなり

新朝報記事

(明治四十一年一月三十日)

いろ／＼に噂されて兎にも角にも變りもの、濱口熊嶽が施術のことは昨紙閉話子が書かれた通りでとても科學的の頭を以て云爲することは出来ない論より證據一日は一日と施術を乞ふ者が増して來るのみで餘程早く行かまいと定員を越して斷はられる

濱松新聞記事

(明治四十一年二月二十六日)

○濱口熊嶽師の神術を見る 四五年前東京で濱口熊嶽の名を聞いて居つたが未だ一回も師に接す

るの機を得なかつたが昨日は玄忠寺に於て始めてその聲咳に接した思つたよりは愛嬌のある先生にして眼光慧々などはとつても附かない事にて軀幹の稍々人並勝れて長大なのと骨格附の頑丈なるだけは特徴で別段に北越の海岸で漁夫の身体を見馴れつゝある僕には巨大なる人とも思はれぬい名を聞いて聊か畏怖してあつた僕には事案外に思はれた人は稱して彼れを大山師寶僧怪漢と稱し或は彼が神變不可思議魔法でも施す神仙老士かの様に思つて居るが之れ等の人は餘り本を多く讀んで居らないから斯かる疑惑を懐くもので若し夫に催眠術の一冊も讀んだものならば齒を抜くことや黒子を取ることは未だぢんでもない弘法大師の再來でもなければ生佛でもない裁判所や警察で始め喧かましく囃し立て、愚民を迷はす妖僧であるとか何んとか言ひ出したのは之れ元來が司法官や警官に心理學精神科學の一書も讀まぬ淺見から來たもので尙くも精神科學のはしくれても囃しつたものであれば決して不思議はない肉体か精神に影響するは誰でも知るが精神が肉体に影響するは非常なるものにして此頃は續々それが證明實驗さるゝのである兒童を捕へて汝は最早や其處を立つことは出來まいと云ふ位ひの實例は催眠術で尋常茶番の事て箸を持たして之は焼け火箸であると言ふのを與へるに手の面が火傷したと云ふ實例もある故に佛教などで弘法や日蓮が行つた秘法など云ふのも少しも現今の心理學あたりから見ると決して奇蹟とするに足らず要するに熊嶽師は多年修業の結果メスメリズムを自得したもので之れを神通力と言へば言はるゝ之れ此の

人の徳が自ら備つてをるもの此う生意氣を云う夫なら尋常人が熊嶽師の如く出来るかと云ふにそれは六ヶ敷矢張之をやるには経験も積まなければならぬ扮装も行者風に粧はねば人は信用せぬ兎に角人が見て此の人から信を置けると云ふ迄に至らなければならぬ之れ人が授けて得らるるものに非ずして自己が自ら修得するより仕方ないだから何の病氣でも熊嶽師に頼めば療ると云ふも二のに非ずして肺病や癩病患者が神通力で治すると云ふことは未だ斷じてない故に熊嶽師を秘術魔法遣ひあんど、思ふたならば此は所謂先に言つた多く本を讀まぬ人間の見解で廿世紀的知識の無いものである僕は熊嶽師を殆ど一時間半計り傍觀したが先づ始めに桶鉢に割箸を何本もくも井桁に積み重ね天井に切紙を釣り下げ火を投じて箸を焼き師は白衣となりて眞言の呪文を唱へて九字を切る白紙は觸齒に効能ありと恐らく効能あらんか之れ又不思議でもあつてもないそれから黒点や吃や首振や皮膚病や觸齒や遠耳などの子供が施術を受けたが熊嶽師は九字を切り奇聲氣合をかけて子供を威喝する黒子は甘く取れる老漢の觸齒も抜けた血も出ない乳の不足の人も乳が迸出した肺病は斷つたレウマチスもとうやら良い吃りはど一だか吃りなんども精神的施療法が却て効能がある當警察署からも巡査醫者も見に来て居られたが僕は十時半寺を辞して歸社した

同新聞記事

(同二)

○濱口熊嶽の公共奇金 此の間から當地玄忠寺に來て日に二千人からの患者に施術を行ひつゝありし濱口熊嶽は非常の大繁昌にて玄忠寺附近新に露店が出づる程の混雜其の口其の口の収益も益し多大あるべきが元來が慈善好きの男とて當地小學校新築校舍に金拾圓に濱松育兒院へも多少奇金すること人間はどんな偉いものでも此の一片耽々の菩薩心がなければ所謂湯仰隨喜の中心となることは出來ぬ濱口熊嶽に偉い處はこゝにあるのだ

濱松新聞記事

(明治四十一年三月一日)

○熊嶽師の研究 自稱神アウンバラを訪豫言者宮崎虎之助と語り博徒の親分と談じ八卦人相見に接す所謂天下の異分子に逢ふて快と感ず之れ余が性癖銅臭斗屑の紛々たる平凡漢尤とも嫌厭に堪へず吾れ自ら三密の奧秘を極めたりと稱する濱口熊嶽を訪ふて茲に熊嶽研究と題す之れもとより余が見たる熊嶽師敢て他人の是非を許さず濱口熊嶽傳の書は之れ信仰的の文字を以て各修行僧傳一筆致を撰したるまで此の人の全局を盡さず彼れ熊嶽師は僧傲磊落の一塊漢兒なり漁民的任侠の血脈を傳へる名山大澤多き水波渺々たる自然が造り出せり冒險兒由來宗教と海とは因縁あり世尊然り弘法然り日蓮然り彼れ等は海濱の産水と宗教とはとうしても何等默契する處あるを思ふ熊嶽師の容貌や決して公判始末記に幾多の新聞紙に記せし如き猛惡酷烈眼光炯々何と稱すべき人相に

非ず嘘なら見よ彼れが眼邊筋溝の多きこと左額より右額に向つて走れる一大皺溝の有るを眼光の如き異彩爛々たるものに非ずして極めて平凡な寧ろ愛嬌笑態の多き無邪氣な子供らしき人好きのする骨相なり骨格は成程普通の人より長大なり彼れが祖父の遺傳より來るもの其の聲音の大なるも之れ海上の生活を行ふもの状態彼れが性格の如き一寸憤り易き直情經行らしき而も邪氣なく腹に思ふ處をドシ／＼云う所なすは眞に正直明眼中人なく又して謙遜辭讓助才なき遊り一見不可短晚怪物の如く見ゆるならんが是れ彼れが早く世に名を爲す故に一見甚だ無頼不羈の如きれど割合に神経過敏ある邊は煙に受け取られ人を克く見るの眼ありて譬へば彼の施術を受けんとする時信じない様な人間と見ると直に斷り又半信半疑の者には暫く待たして氣合を人れ置くが如き女子の月經者を撰び出すが如き白衣一枚行者姿となつて手と聲と氣合に依て如何被術者をして全く其の威に服せしむるか是れ明にメスメリズムの應用の達人に非らざれば能はず余は斷言す天下何事も全く絶對的に信じ得るものあらば精神を以て肉體を支配するが如きは何んでもなし心頭滅却すれば火も又涼しと云ふ義經が烈火の金盃を持ち得しも彼れが全く熱くなじと全く信じたるより來るなり此に於て禪僧の火中に投じて涼しと感じたるも道理あるなり

○熊嶽師の研究(承前) 此の頃西洋にて不老不死の術發明せらると之れ死は偶然なり大木の暴風に倒るるが如し細胞は新陳代謝あつて死なしと之れ生理學よりの研究なれ共又精神科學より此の

理の發見せられざるに非ず世の中に自己の精神程恐ろしい力を以て居るものはない纖弱なる一婦人が殘虐なる殺人犯を行うが如きも之れ明らかに精神の力の偉大なるを適面に證するに非ずや予は或る點に於て精神萬能論者である心理的作用を以て疾病を治療するが如き遠からず餘り珍らしからざる時代の來るを信ず、快男兒熊嶽上人は桑門の出身であつて跣頭縮衣の徒は嫌ひであるぞうやら田舎も嫌ひである去る日に大石館を訪ふて上人の氣焔萬丈を聞き之れから大いに蓄財せられて洋行せらるゝと云ふが去る土曜日は在濱松の新聞社員連を招待して一層の大抱負を吐かるゝとの事なるが予が師と一所に濱松座に毛谷六助を慕見送るの光榮を有したるが之れも何等かの緣因ではあからうか予は茲に何等か物質以上に心織點契サムシングの傳道があるのではないかと懷疑して居る彼れが芝居を見て頻に感に入ると奇聲を發して喜ぶ様の無氣邪にして愛嬌ある英雄は小兒に似たりとの陳腐な語があるが兎まれ熊嶽上人は常麟凡介の徒ではない賣僧にしる山漢にしるあれだけの技術と徳光とを以つて居る以上は明かに現世安穩的我が物質主義の時代には民心の渴仰を慰する大なる傳道者である往らに煩瑣なる理屈を捏ねて智者大徳と自稱せるかの賣僧に比して寧ろ熊嶽上人の如きは見成性佛單刀直入不奪何とから眞言三秘密の法當意即妙之れを何と言つても宜しい濱口熊嶽師は現世安穩界の心靈界の大導師である豈に眞言の行者のみあらんやである

濱松新聞記事

(明治四十一年三月五日)

○熊嶽君濱武館へ寄金す 各地到る處に於いて毀譽せられ褒貶せられ而かも自己の信ずる所を頑として扞げず真言の行者として神通秘力を用ひて幾多哀れむべき痼疾者を平癒せしめつゝある濱口熊嶽君は其の日々得る所の収入の幾分を到る處の慈善公共事業に寄附しつゝ爲善取樂の教へを守つて財を散じ居りしが今回も當地濱武會建設費の中へ五拾圓を寄附し昨日も午後北川事務員に直接持参せしめて當警察署へ出頭し其の寄附方を兼岩氏に依頼したり猶育兒院へも應分の寄附をあし向ふ二三週間は患者の希望に據り當地に滞在して不相施術をなすと云へば信不信治不治は論外にして彼れが祈禱を受るも亦妙なるべし

濱松新聞記事

(明治四十一年三月十四日)

○寄書 天河申す予先きに濱口熊嶽君を紹介す三口間の紙上に渡り而かも俗務多忙の予は潜心推敲を許さず研究と云ふと雖眞に思ひ付きを記したるのみにて其の斷片にして秩序あるものに非ず去れど渠が一種のメスリズムの應用あるは予斷言して憚らざる處熊嶽君又之を認承すメスリズムの學者日本又多し而かも術の巧妙なるは予は濱口君を推して日本一とす學者として本縣の故桑原俊郎氏を始め千葉縣に楠木氏あり然れ共眞に科學的研究者にして尤も造詣に深きもの福來博士に於て之れを見る心理學界の泰斗ラッド氏此の學に精通せられ泰西の學者又頗る多し今當地

辯護士村松仲吉氏熊嶽の秘術と題し立論堂々脈路貫通條理ある科學的立脚地に立つて其の研究を寄せらる之れ催眠心理學として將た一種の精神哲學として可なり讀者之れに依つて自ら啓發し多大の趣味を以て再讀三讀の價あるを信じて疑はず

○熊嶽師の秘術(一) 辯護士村松仲吉：濱口熊嶽師の所謂眞言秘密の法術と云ふことに就いては既に濱松新聞の記者天河氏に依りて去る二月廿六日の紙上に掲載された全氏の見解に依れば熊嶽師の法術は畢竟一種の催眠術である別に不思議でも奇蹟でもない現今の心理學から云へば肉体が精神に影響すると共に又精神も亦肉体に變化を生ぜしむることは實驗心理の證明する處であると云つて居るが併し之れには尙深く研究する事項が澤山あるのて唯單に心理學應用と云ふだけでは恐らく一般の人をして容易に肯定せしむることは出来まいものと思ふ依て余は少しく法師の秘術は何故に斯かる偉大の効果を奏するかに就て一言述べようと思ふけれども余の茲に論ずる處のものは決して新しい考ひであると思ふ譯でない唯多少之れを學問的に考察して之れは何んであるかを平易に述べて見よふと思ふのみである余は先づ研究の順序として法師の秘術を心理學上から觀察して催眠術と如何なる關係があるかを簡單に述べようと思ふ

○熊嶽師の秘術(二) 凡そ人間には種々なる心の働きがあつて物を知ると云ふ作用もあれば又事を行つと云ふ作用もあり又快不快を感ずると云ふ情的的作用もあるけれども之等は或る一定の系

統の下に統括されて居るもので人は常に此の心の統一に依り一定の目的も定まれば又一定の行動もとれるのである而して又心の統一は時間の觀念に於ても必用なもので假令へば過去に於ける我は現在の我と同一なる我であると言ふが如きである人は斯かる心に統一があつて始めて秩序的の活動が出来るのである心理学では此の心の統一を指して人格と云つて居る然れ共此の人格即ち意識の統一と云ふものは決して各人完全に存在するものと云ふ事は出来ない誰にも多少一定の系統を離れた精系作用がある學者は之を精神の潜在的活動と云つて居る之れは表面の統一された精神作用には顯はれないもので其の表面の意識に對しては全く無意識のものである而して一度此の潜在的の精神が分裂して活動するときは同一の人は全く別人の如くなるので從來の經驗に付いては一切記憶なく其の人の氣質まで變るので之れを人格の變換と申すそこで斯かる精神現象は如何にして起るかと言ふと其の原因は二種ある一つは自然に起るもので他は人工によるものである其の自然に起るものと云ふのは即ち「ヒステリー」患者の様なもので人工に依ると云ふのは即ち催眠術を施すことである

○熊嶽師の秘術(三) 催眠術は千七百七十年の頃獨逸の醫師「メスマー」と云ふ人が發明したのでありまして原語では之れを「メスマリズム」と申します尤も「メスマー」以前に於て既にガスナーと云ふ僧侶が之れに類した施術を行つて居たのであるが未だ學術的に研究したものではないから先

づ「メスマー」を以て發明者として居るのでありますさて催眠術は如何にして施すかと云ふと其の行ひ方は一定して居らぬけれ共之れを精神作用の上から見ると極めて靜かなる方法を以てする者と急激なる方法を以てするものと二つある而して前者は單調なる刺戟の反復より起るもので假令へは手を以て被術者の顔を撫ずるとか或は光輝ある物体を凝視せしむるとか云ふ様かやり方である後者は神經に劇變を生ぜしむるもので假令へは大聲にて被術者を威嚇するが如きものである催眠術は斯の如き方法に依りて精神に變化を生ぜしめ以て容易に催眠状態を起さしむるのである而して一旦催眠状態に陥りたるときは全く平素の自己の經驗を忘れ平素の自我を離れ全然別人とあるので先きに人格の變換と云つたのは即ち之れである併しながら獨施術者の命令にはよく従ふもので汝は六才なりと云へば全く六才の往時に立ち返り其の當時の經驗を繰り返す様にある又木片を與へて之れは銃なりと云ふ時は之を手にして全く銃を狙ふが如き姿勢をとるのである其の施術者の與ふる命令は之れを暗示と云つて被術者には一々錯覺若しくは幼覺となつて現はるゝのであります催眠術とは斯やうなものである然らば之れに依て何故に疾病を治療することは出来るかと云ふと之れには今少しく精神と肉体との關係を述べなければならぬ

○熊嶽師の秘術(四) 吾人の身体は總て肉体によりて包圍せられ其の内に澤山の神經がある然して其の神經は細胞と纖維との二つより成るもので吾人の神経作用を惹起せしむる根本の組織であ

る細胞は所謂神經作用を營むもので其の形は多少圓形を成して一個若くは數個の突起を有し之れに依て神經纖維に連絡し居る纖維は細長き糸状を成せる柔軟なる物質で細胞より起る震動を傳達して腦の中樞に送る腦に於ては之れを受納し統一して茲に始めて知覺を生ずるのである既に知覺があれば茲に觀念起り次で記憶想像推理判斷と云ふ様な種々複雑なる精神作用を生ずるに至るのである故に人の精神作用は其の基礎を肉体的組織即ち物質に置くものであつて物質の變化が直接精神に影響すると云ふ事は明白なる事實である假令吾人は病氣に罹りたりと假定せよ吾人は先づ肉體上の疾病の爲めに直に苦痛を感ずる次で不快の感情を起すのが常である更に其の不快の感情は吾人をして種々なると思はしめ遂には世を悲觀する様な結果に於る之れ即ち肉體の變化が精神に影響する例証である次に精神が肉體に影響するかと云と矢張然りと答へなければならぬ假令吾人が精神上に一種の快感を起したりと假定せよ此の場合に於ては腕の容量を増し脈管を開帳せしめ脈搏の強さ及び長さを増加せしめ呼吸を深くし且つ筋肉興奮の度を高むる之れに反して若し感情の不快あるときは筋肉を收縮せしめ脈搏遅くして且つ弱く一般に身體を縮少せしむる傾向がある之等が一例に過ぎぬのであるが兎に角精神作用が直接生理上に影響すると云ふことは証明することは出来る

○熊嶽師の秘術(五) 斯くの如く精神と肉體とは密接不離の關係があるもので一方の變化は直に

他方に影響することは實に明瞭であるされは今患者に對して催眠術を施し精神状態に變化を生せしめて其の疾病を治するといふことも決して不思議はない殊に疾病の多くは其の原因を精神上の變化に置くか若しくは少くとも生理上の變動と共に精神的變化を伴ふもので之れに精神の療法を施せば實に根本的の治療をはかることが出来るのである然らば此の催眠術あるものは苟も其の術に通じてさへ居れば何人にも出来るかと云ふと之れは大いに疑はしいのである今熊嶽師の行ひつゝある處のものを見るに畢竟一種の催眠術には違ひないのであるが其の疾病を治することの迅速にして且つ容易なるは驚くべきものである尤も催眠術は唯施術者の精神のみを以て行ふも決して目的を達することの出来ないもので之れには必ず被術者の精神を要する即ち施術者の精神と被術者の精神が一致契合したる場合に於て始めて効果のあるものであるされは其の意識の關係と云ふものは催眠術の前提要件とあるもので此の意識のよいものに對しては全然無効である故に草木や禽獸に對しては行ふことが出来ぬ而して又意識契合の程度を云ふものに付いても深淺の差があるのて若し極めて深く契合すると云ふ場合には必ず其の効果も著しいものであるされば畢竟熊嶽師の法術も能く被術者の意識をして契合せしめ得るので夫れが爲めに効果が著しきものと云はなければならぬ然らば何故にかく意識の契合が出来るかと云ふと

余は被術者に極めて強い宗教的意識の存在する結果であると考へる茲に於てか余は更に宗教の門

に入りて少しく其の意識との關係を論じなければならぬ

○熊嶽師の秘術(一六) 古來宗教には幾多の種類があつて其の容体を神とするものもあれば又佛とするものもある又同と神を立つる内にも夫れ／＼宗派により教義も異なれば儀式も違ふのである併し何れの宗教に於ても各人の信仰心即ち或崇高なる力に對する畏敬の感情より起ると云ふ點に於ては同一である

元來人間と云ふ者は極めて小なる有限の智能を頼み限りなき宇宙に存在して居るものであるから到底宇宙の全般を知ることが出来ぬ即ち宇宙には人間の意識の達せざる境涯が澤山ある而も人間はかゝる宇宙にありて屢々不思議の現象に接し或は不時の災厄に遭遇するとか或は非常の不幸に陥るとか云ふ様事があるのである人心の危懼と云ふことは一刻も免かるゝことは出来ぬ茲に於てか人とか佛とか云ふ様な宇宙を支配して居る無限の力ある存在を思ひ之れに依りて信じ之れに歸屬して以て安心立命の地を得んとするに至るのであるされば宗教は畢竟人生に存在するもので其の意識は自然に發生し其の宗教は自然に人の意識に反映するのである而して其の意識の内に入り来る神若しくは佛と云ふ觀念は其の宗教的信仰の深きに從つて愈々明瞭となり遂には全く其の神乃至佛と一致し之れと合体するに至るのである

今日の科學から云ふときは勿論神だの佛だのと云ふ觀念は絶対に否認されるのであるが併し之れ

は神乃至佛が實在すると云ふことの證明が立たないと同時に科學に於て實在せないと云ふことも證明が立たないのである故に實在するともせないと云ふべし或は人間の想像するが如く宇宙を統括して居る神とか佛とか云ふ者があるかも知れぬ而して其の神佛がよく人間の信念に交通するもので人間の災厄を救ふと云ふ様なことがあるかも知れぬ之れは畢竟人間の意識の及ばぬ處であるから何んとも云へぬそこで人間は斯く信ずる凡る世の中に知ると云ふことの出来ぬものは獨り神や佛のみでない其の他に澤山あるけれども知ることの出来ないものは直に之れを無きものとする譯にはいかぬ到底知ることの出来ぬものに對しては唯信するの外はない之れを信すれば我が心にも神も佛も出来る心に神や佛があれば之れに依信して充分救を得らるゝのでないかと此の信念即ち神や佛に對する信仰心と云ふものは實に強い力のあるもので之れに依て昔から災厄を免れたものもあれば又醫藥も効を奏せざる程の難病を全治したと云ふ例もある之れは今日の科學から云へば無論宗教的意識に伴ふ精神上的の變化が影響するものであると説く然れ共矢張り神や佛の實在を否定する證據のない限りは其の功驗の無いと云ふことも證明し得られない結局は只知ることの出来ぬと云ふに歸着するのであるが併し何れにしても右の宗教的觀念と云ふものは極めて必要なもので之れが原因とありて病を平癒せしむると云ふことは疑ひのないこととあります觀て今熊嶽師の法術を見るに彼れは眞言宗を唱へ秘密の法と稱し之れを行ふに祈禱の式を以てするのである

されば何人でも先づ第一に念頭に浮べる觀念は宗教の本体に對する畏敬の感情である而して此の感情に基く信念は前述の所謂宗教的意識であつて此の意識が能く施術者たる法師の意識と融合するので茲に又一層其の効果を強からしむる原因が存在するのであります要するに熊嶽師の法術は一面に於て催眠術を應用すると共に他の一面に於ては所謂宗教的意識を利用するので此の二者の力に依りて以て能く其の目的を達し諸病を治することが出来るのであると考へる

濱松新聞記事

(明治四十一年三月十五日)

○濱口師の送別會 濱口熊嶽師の招待にて當地施術の成功を祝し且同師洋行の成行を語らんまで一昨日午後六時より傳馬町八百吉樓上にて送別の宴會開かれ紅裙數名酒問の斡旋を取り會する者山田警部麻生警察醫山田醫師村松辯護士玄忠寺主丸三の宮本久野幸太郎新聞社員に村松池田小川加茂塚本鷹野西澤熊嶽事務員杯にて熊嶽兩村松山田警部の奇藝にて滿座に嬌を添へ午後十二時散會す

○立會人小集と八百吉の奇藝 十四日の晩は本社の高僧投票一切て票數調べて随分と立働き紅の小提灯大國旗にて先づ景氣は添へられ平野氏先づ風邪を推して來社せられ山田醫師又妻君の不例をも顧みず來り十一時半日頃懇意にせる濱口熊嶽師之れ大に高僧には縁ありとの事にて大石館を

叩いて立會人になつて貰ひ十二時に得た票數は二面の通り聊か勞を慰まむまでには酒肴出て平野君の長廣告も熊嶽師の愛嬌振り佐藤辯護士の欠席を惜ましむ市川子氣賀子故障ありて至らず去れど熊嶽君の立會人とは前代未聞なり二時の散會十五日の夜は熊嶽君の送別席八百吉の料理一寸甘く喰はせるものもある而し前夜新小路の某のトロ、汁には及ぶべくも非ず熊嶽師の奇談奇藝遠方に襲はれし豪傑談師の各大臣評洋行も今夜の主意の演説終るや村松辯護士の挨拶天河の陽關の放吟座典に入つて綠酒紅燈美形の紅潮と相映じ熊嶽師のサノサより起りてステ、コ日清談判カッポレ手品敷番の踊りは其の態度と言ひコナシと云ひ妙群を抜き大喝采村松辯護士の奇藝又短にして妙味窮まりなく覺易く面白く村松憲氏の錢抜き山田警部の繩切り職掌柄腕を抜き都々逸義太夫は例に依て例の如く奇麗首の踊り嬌艶痴態又倭に嬉しく奇藝も盡きたれば小川子揚言して熊嶽君を推賞し熊嶽師閉會を告げ午後十一時と正に三十分、東西群を組んで各々欲する彼岸に向つて梶を取り余は熊嶽山田の兩氏も鍛冶町に漆器分館に入りて日頃のない氣焔を掲げて分散時に十二時をすぎ月白の下天地鐵の如かりき

三遠附録

(明治四十一年四月十二日)

○小鶴と熊嶽 豊橋札木にて漢語柏子と唄はれ東京新橋を喰詰めて再び札木に舞戻り四階樓上に

氣焰萬丈吞拔柏子も評判せられたる金穂樓の小鶴は彼の怪僧と呼はるゝ有名なる熊嶽も何時しか關係をつけたりと熊嶽が去月豊橋を去つて濱松に出掛ける際に専ら噂されたる所なるが熊嶽は元來放蕩無頼にして締女に對してこれまで好からぬ如く視せられたり

静岡民友新聞記事

●熊嶽の御世辞宴會 難症治療も上手なりとの事あるがその御世辭が更に上手なる濱口熊嶽は本月上旬より掛川北門に於て例の不問治療をなすつゝありて日々その門に集まるもの數百名とは恐れ入つたもの袋井でかつぼれを踊つてお世辭を振舞いたのに味を占め又々掛川でこの手を以て十九日夜小泉樓に大々的御世辭宴會を開いて熊嶽獨得の魔術を以てお客さんを煙に捲いて了ひたり尙ほ本月中は掛川に滞在し來月は島田へ移るとの事熊嶽にし若し愚民を惑すが如きことさくんば即ち齎めたものなり

●熊嶽と被施術者 寶蔭院に於ける熊嶽の施術は静岡に於て意外の好評を博したるものゝ如し催眠術か、神通力か、殆んど之を知るに由なきも兎に角實驗上その効果の多からざるより見れば、精神治療即ち感應法の忽にすべからざるを知るに足るものあらん、而して熊嶽の施術を受けんとて遠近より集まり來れるもの多き中に静岡以東即ち江尻、清水、興津甚だしきは富士郡邊より來

るもの多しと云へるが、聞く所によれば熊嶽は静岡に滞在すること約二週日にして江尻、清水に赴き同地の患者に接し相當の時日を施術に費したる後、興津、山比、蒲原を一九として適當の施術所を擇み滞在すべく次は沿道特別の招聘を限りて沼津に入りそれより順次箱根を超えて上京し旅裝成るの後豫ての宿望たる海外漫遊の途に上るべしと云ふ、熊嶽の手術に就ては醫者も學者も一寸説明に苦む點かきにしもあらざれば矢張之にも一種の眞理あるは勿論にして充分に之を研究したらんには中々面白さふしも少からざるべし、當市富永醫師の如きは普通の催眠術以外に一種の通神力あるものを學理的に研究し居らるゝ人なるが同醫師は熊嶽を以てこの術にかけては兎に角非凡なりと云ひし由なり

●濱口熊嶽の懇親會 去月より磐田郡山名町袋井の觀福寺にて施術をかし不思議を秘法と大氣焰とに素人目を驚かして毎日新患者五六百名宛殖へて來るとは遠に熊嶽の手腕也と讚めて置くより外は無いが彼は去二日の夜同町疊屋料理店に同地方の有力者を招きて懇親會を催し會する者數十名中々の盛會なりしが殊に酒宴に移りて人々の隠し藝あり中にも熊嶽先生見かけによらぬ藝人にて其内十八番のカツポレ踊の如きは見るものゝ舌を卷かせしとは愈々以て隅には置けぬ男と云ふべし

●愛嬌ある熊嶽 カツポレ踊に侮り難い腕を持つて居る濱口熊嶽氏は一昨七日一先づ磐田郡袋井

を打揚げて昨日掛川町に行つた掛川では七日間内の施術を行ふとの事だが愛嬌の好い熊嶽氏は袋井を去る時記念のお祝としてグラ／＼と湧き沸る大釜五つ許りの熱湯を全身に浴びせて参集の人々に見せたろうだ別に譽める程の事でも無いが飽迄俗衆の目を驚かすには妙を得て居る人物と謂ふべした妙を得て居ると云ふ序でに素破抜かうなら此の人、女の路にかけては頗る剛の者だが面かも自然主義を實行して敢て人の誹を買ふやうな襟襟を出さぬ事に於て又驚くべき秘密を持つて居るとは誠に愛嬌がある

●濱口熊嶽とは甚麼人か 濱口熊嶽は目下藤枝に杖を停めて祈禱に従事して居る、熊嶽に關しては世上の毀譽褒貶が一つてない、善惡の意味は暫く別としても彼は體かに一代の奇傑である彼の性格やその行ふ處の靈感術は兎に角研究に値いするものがあらう、記者は一日藤枝の客舎に彼を訪ひ稍々彼の側面を伺ひ待た彼に關する評論は後にして今左に當時記者と熊嶽との間に交換せられた問答を記して見やう

熊嶽の年齢は三十五六歳で額が廣く鼻が高く口元が締つて人の字樣を著へ筋骨逞ましげにその眼光が炯々として人を射る言語には俗調があつて少しく輕過ぎるか元氣の旺盛に精神の非凡なのは彼の特徵である、彼は書生五六人を左右に置いて能く淡く語る

問、君は何處で生れて何人に就いて教を受けたか、

答、私は三重縣牟婁郡長島町の漁父濱口長松の長男に生れ十三才の時分處世上の方針に就いて考へて居りましたが或る夜の夢に感じて斷然家を捨て紀州那智山に分け上り彼の有名を文覺上人の修行の跡と傳ふる那智の瀧へ行つて専心修行中鶴賀仙人の稱ある實川上人に邂逅してそれから約三ヶ年眞言秘密の法を學びました、

問、其法を應用すると何んな病氣でも癒るのか、

答、病氣の癒る癒らんは信仰の如何に依るものです、私を信ずるものは必ず癒ります、

問、君が祈禱者となつたのはどう云ふ動機から起つたのか、

答、私は明治二十六年に郷里の眞言宗安養寺といふ寺の住職とはあつたものゝ熟ら方今の太勢を考へて見ると、社會の興利幸福を増進するには是非國民教育を盛んにしなければならぬ、私も元は漁夫の家に生れて學問と云ふものをしないから常にそれを残念に思つて居る位、この人智の發達を計ると云ふことは目下の急務であると考へて先づ第一番に自分の住職たる安養寺を賣り拂つて數千圓を拵へて村の學校基本金に寄附しましたこんな亂暴なことをしましたから本山から譴責を喰つて遂に寺を逐はれることになつて仕様がなから今日の祈禱者となつたのであります、

問、その後は祈禱専門であつたのか、

答、祈禱は先づ専門でありましたが、うの間に眞言觀瀾派東京分教會長を勤めたこともありま

問、君としての祈禱の目的は如何、

答、今度上京の途次で御常縣の各地に錫を止め諸君の歓迎を受けた次第であります。私の目的と云ふものはどうしても一大慈善學校を興さうとするので東京着の上に準備を整へて先づ佛國に渡りうれから歐米各地を巡錫して大に金を儲けうれを資本に東京へ私の希望の學校を建てるので、一億圓ばかりは儲けんと不可せん、併し御當地を巡錫するには書生一人の飯料を一日一圓四十錢宛給しうれに利餘があれば公共事業に寄附する方針であります、これは私の癖で今までも色々々方面に度々寄附したのであります。

濱口熊嶽が甚座人であるかは一寸紹介して置いたが今度は彼の手術とは甚座事をするのであるかを紹介して見やう、彼の行くことを手術と云つたら少しは語弊があるかも知れぬが彼の靈感術、言ひ換へて見れば催眠術應用の心理的感應法を以て患者に接しうの患部を治療すると云ふのであるから此處では手術と云つて置かう。

六月二十一日の日曜は夏の日が照り耀いて焼けるやうに暑い、自分と楚江生と二人焼津驛で降りて田浦中の道を俥に揺られながら先づ藤枝の魚安旅館に彼を訪ふて汗を流した上、彼の書生に案内せられて治療所に充てられた警察署裏の養命寺へと行つた午後一時から治療に應ずる筈で既に

數百人の患者が本堂一杯に詰めかけて今や遅しと待つて居る。

熊嶽は白衣に白袴の扮装で端然と上座に構へた、自分等はうの傍らに座つて甚座事をするのかと注意深く見て居た。

彼は並居る患者の前にすつくと立ち上つて「我輩は漁夫の八公であつた、今も漁夫の八公で自ら任じて居る、その八公の我輩に對して諸君は糧を贈つて下さる所のお客様である、諸君からは二十五錢の治療料を頂いて居る、併しながら我輩は諸君から二十五錢を頂戴するが故に治療を施すのとは少々違ふ、我輩の治療は二十五錢を以て論ずべきものではない、我輩には信仰があるこの信仰に依つて諸君に現實の幸福を授けやうとするのである、二十五錢を以て必ず癒るとは云へぬ、信仰なきもの、我を信せざるものに對しては百萬金を積むと雖も我輩には治療に方法なし、然らば諸君は我を信ぜざるべからず、我は諸君の保護者である然り余は是より治療は應ず!!」と大喝して置いて眞言清淨の護摩を焚く、火炎がバツと立ちのぼる、人々の視線が一様に彼に集まる、この間に於ける熊嶽は眞に神の如き形相で全く無念無想の境界にあるらしい、護摩を焚き終ると彼は先づ始めての患者から順々に自分の前に引き出す、引き出された患者は彼の眞正面に座る、お前は何處が悪い、頭痛がするとうるか宜しい」と句呪を切つて大喝する「どうだ癒つたか」と聞く「お陰様で軽くなりました」とお辞儀をする「嘘じやあるまいな、最う一度痛くしてやらうか」

「どうぞ御免下さい」と云ふ、最う宜しい歸れ。それから次のが出て来る齒の悪い人、目の悪い人、胃腸、神経、痲瘋知斯、肺病患者も居れば若い婦人の子宮に患まされたものも居る、老若男女難然紛然として堂に満ちた、緩んだ齒が締つた、邪間な齒が抜けた、黒子が無くなつた、起たぬ足が起つたと二三時間の治療の内にこんな夢のやうな効験が自分等の眼の前に現はれる、その内でも人々を驚かしたのは四年間痲瘋知斯で兩手が胸に密着いて足は曲つたなりと云ふ大患者がメキ／＼と手足の運動を促して来たことである。

並居る患者の間を附添の家人に援けられて座行り出た一人の婦人、年の頃は二十五六、目鼻立は賤らしからず、良家の子女の條を何處かに僞ばせては居るが、四年間の大患者は彼女をして生あることを知らず、只々前途に暗い死のあることをのみ思はしめたのであらう、横い兩手は胸は前て組合はせ、膝は曲つたなり、憔悴せる顔色は人々をしてうろ過去四年間に涉る彼女の生活状態を思はしめた。

彼女は痲瘋質斯の爲めに花の盛りを斯くまでに折り挫かれたのだと云つた、藤枝町のさる士族の家に生れて人々の聯想し得る程度に於て彼女の若い生活には不自由はなかつたであらう、彼女が緑りの髪は褪せて人々の結へるが如く若々しく飾るの慾も失せたのであらうか、密着いた兩手、折り曲つた兩足、如何なる魔に呪はれたのであらうかを恐れしめた。

熊嶽は徐ろに彼女の手を取つて、その顔を繁々と眺めた、密着いた兩手は静かに胸を離れて自ら物を握り、身体を擦ることが出来た、彼女は今日で四日熊嶽の手術を受けたのであるううな、下から熊嶽を見上げた彼女の兩眼からは歎びに堪へ切れぬと云つた風に「ホロ／＼と涙が溢れて落ちた、自分等はその密着いて居たと云ふ兩腕を仔細に見た、緋い白い兩腕の處々は四年間密着して居たと云ふ跡が、接木を離した跡のやうな斑紋を止めて如何に彼女が病苦に悩まされて居たかを想像することか出来る彼女が嬉し泣きに泣くのも神に向つて感謝する人間至情の涙である。

熊嶽は微笑を含んで「どうだ嬉しいか、嬉しいぢやろ、熊嶽はお前を歩けるやうにしてやる、拜みなさい、拜みなさい」と云つた、彼女は四五日前迄は手を合せることも出来なかつたが、今日は熊嶽の前で、立派に兩手を合せて「嬉しう御座います、どうぞ歩けるやうに」と力ある聲で言つた「宜しい、余は爾に歩けると云ふ暗示を與へる」と云つて彼女の腕、足に向つてその不可思議な靈感術を施したヤツと一聲の氣合の下に患者は云ふべからざる靈妙奇快感に打たれて、一瞬前の苦痛の境界から脱出する「有難う御座います」と臆て付添に援けられて熊嶽の前を退いて行く彼女の後姿を人々は一様に見送つた、そうして更に熊嶽の顔を見ると今の婦人を忘れたやうに既に他の患者に接して居るのであつた。

熊嶽は自分で言つて居る、我輩の術は心理的作用と云ふより外はない、それが何故患者に施して

効驗があるかは自分でも譯らぬ、平たく言へばまあ催眠術に毛の生れたものだらう、魔法であるの、薬を使ふのと云ふことは決してない、極めて純正な、即ち是れが天下獨歩の熊嶽術であるのだと或はそうであらう、普通な人間に一寸行へない術であるから彼が野師の行動に出て、愚民を惑はさき限りは我々は暫く熊嶽に傾聴するの外はないのである

●熊嶽の手術とは甚だ事か 何か受付の方で人のどよめめ聲がすると突如として熊嶽は立ち上つた「諸君に申して置きます、我輩は宿に居る時には黒い衣服を着て居る、黒い衣服を着て居る時には女と云ふことも考へる、酒も呑みたくなる、どつちも人並以上にやります、けれども熊嶽はこの教會に在つて白衣を着て居る時丈は慥かに神聖である、我輩の前には王侯も亦く卑賤もない、男も女もない、總て一視同仁である、それに何や我がこの神聖な教會へ昨日一人の美人が來た、そうして我輩の受付が少々ハイカラであるものだからその美人と受付との間に何等か意味のありそうな汚れた視線が交された、受付も不都合であるがその美人も頗る不都合である苟くもこの教會へ出入するもの、否な入つた所のは、どんな貴い所のお嬢さんでも又は乞食の私生兒でも我輩の慥かに預つた所のもので決して汚れた思想を持たせてはならぬ、それであるから我輩は昨日その美人の治術を斷つて突き出して終つた、熊嶽は女が好きである、酒が好きである、けれど汚れた女汚れた酒は決して我輩の手に觸れぬ、諸君の身体は兎に角現在に於て我輩の預つ

た處のものであるから我輩の命には只是れ従ふの義務がある、決して汚れた心を起すなかれ、余は治療に應ず!!」とドンと座つた、彼の後方からは二人の書生が團扇を手離さず風を送つて居る患者に對して彼が掛け込む氣合の一聲は凄いやうに患者の体中に向つて「ヤーツと突き込まれる、その一聲の氣合が熊嶽の生命である、彼が満身の靈火は此時バツと耀くかのやうな氣持がするのである、昔から氣合の術と云ふ事は行はれて居て、斯かる治療に従事したのも少くないと聞いて居るが熊嶽がその氣合の術者であるとすれば彼は確かにこの術の一大成効者であらう

一人の五十格好の班白髯の生へた神經病らしい患者は、熊嶽の治療で頭が清々した是て最う考へることは何にもありませんと云つて潜々と泣いたのを見た、牛乳でばかり育てたと云ふ色の乳白も可愛い男の兒を抱いた若い妻君は熊嶽の前へ出て來て、密着いたやうな小さい乳房がその治術に依つて見る間に膨大して乳頭からは乳が盛んに噴出するを見て自ら怪む風であつた、抱かれた兒供はそれを見て嬉しいやうな笑を浮べた、凡そ憊んな人生の不幸に觸れて居る多くの患者が熊嶽の前へ出て蘇生の思をするのを實見した我々は、我々の頭腦が常に科學的にはかり傾いて居たことを少々恥かしく感じた

●八公的熊嶽愛嬌ある天下の好漢 「我輩は漁夫の八公である」慈う云つて彼は嬉しうに愛嬌ある笑を送る、漁夫の八公は彼に取つては花の香を歎く美しい追憶であるに相違ない、八公を額頭

に飾つて自製の鑑とするとせば彼は我家の歴史を忘れぬと云ふお手本にある、けれども熊嶽も人間である、漁夫の八公から出世したと云ふ事は人並に嬉しく、又人にも語つて聞かせたいであらう、彼が調子に乗り過ぎるとこの漁夫の八公を濫發する、濫發された相手の方から見ると、少々八公を街つて居はしきいかと思はるゝ節があつて、熊嶽の統は此處だと氣が付くが、八公を標榜する熊嶽の顔面には誇張の筋肉は流れて居らぬ、極めて大真爛熳で、自ら街はんと欲して街つて居るの跡がないだけ、八公的の愛嬌がある、八公的熊嶽は畢竟愛嬌の熊嶽である。

彼の口は中々健全に働く、新聞を逆さに讀む我輩だと云つて威張つて居る程の熊嶽であるから學術上の話はせぬが、自分の経歴や信仰を語るときは確かに學者以上の雄辨を振ふ、ううしてその雄辨は決して相手を厭がらせぬ妙味がある、彼の語る所のものは平凡な中にも何處か神秘の色を帯びて居るが彼が一聲の氣合の下に生ける木の葉がバラ／＼と落ちたと云ふ事からは人間を人間の身に及ぼして齒を抜く事を覺つたかどは確かに一の神秘である、それは悠々云々話である、彼が那智に在りて實川上人に就て修行中九十歳の高齡に達した實川上人は宇宙を遠視して那智の瀧を躍り降つて入寂した、その時熊嶽は師の跡を追ふて瀧を降りんとして誤つて轉落した暫く人事不省に陥つたが蘇生の状態に歸つてふと氣が付くと上人は瀧の下に座禪を組んで端然として入寂して居る、自分とは見ると、左の足に大怪我をして鮮血は淋漓として流れ折骨した足頭の疼痛は堪

ゐられぬ程であつた、師たる上人の始末より自分の身体が自由を失つて居るので豫て上人から授かつた術を施すと不思議にも血が止まり痛みが去る、熊嶽茲に我術の悔るべからざるに驚いた忽ちにして身体の自由が協ふやうにあつたから彼は上人の膝下に近づいて三昧に入らしむべく木の葉の濺淨を行はんとしたが生憎木の葉がさい見上るばかり高い瀧の上に當りて少しの樹の繁りが目に入つたが扱てそれを手にする工夫かさい、彼は一策を案じて小石を抛つて見た、石はその樹に達しなかつたが不思議や木の葉が一枚バラ／＼と落ちて来る、はて是は夢のやうな事であると共に石を取らずに一聲の大喝を試みた同じくバラ／＼と落ちて来る面白くなつて數十度も繰り返した、悉く落ちる彼は茲に驚の眉を開いて木の葉の落下すること斯の如し之を人間萬物に施せば生理上の効果も亦恐らく斯の如きものあらんと初めて大悟したのが齒抜の法であるとは何と神秘的な話ではあるまいか

●濱口熊嶽來る 本日より寶台院に於て施術すべき濱口熊嶽氏は昨日午後二時當市に來り大東館に投宿せり

●寶台院の熊嶽 濱口熊嶽の人となり及びその人民自由術と稱する手術の非常の効驗あることは本紙が數日に涉りて紹介せし如くなるが去る一日よりは市内寶台院に於て市及び市附近の人々に施術中にして、既に被施術者を驚喜せしめし事少からず、警察官も昨日は臨檢したれば何等その

手術に於て怪しむべき所なきを認めず熊嶽の言へるが如く進んで之を諸外國に施し以てその抱負を全からしむるに到らば誠に愉快なる事なるべく先年京地に於て傳へられたるが如く怪怖なる証を脱して一人の偉人として世に立たばうれも亦愉快の事なり

●熊嶽入江に歓迎せらる 入江町法岸寺に於ける濱口熊嶽は非常の盛況にて毎日滿員の有様ありしと因に同師は本月中は同地に滞在し次は蒲原あたりに施術し漸次東上すべしと云ふ

●熊嶽と馬車腕車 吉原町に施術中の濱口熊嶽は全地方に歓迎せられ唯稱寺の門前は殆どお祭の如き騒ぎにて吉原全町の馬車腕車は悉く唯稱寺に集まるべき患者を乗せて馳せ遠ひ日々五百人以上も詰め掛けてさしものに廣き唯稱寺の堂宇も是等の人を以て埋められたりと熊嶽の術の如何は兎も角も全地方の人々は大にそを多とするもの、如くにして去十七日より更に一週間を日延するこゝとなり全日高砂館に於て全町有志十數名を招待し披露の宴を開き例の愛嬌ある隈篋を以て盛んに客と戯はせしとは振たものなり

公報社記事

●濱口熊嶽の先生と稱する悪漢(詐欺に罹らぬ療法) 去る三十日のことあり磐田郡上淺羽村字淺野牧野太七方に年令三十五六の法衣を纏い釋伏を持ちて箱様の物を背負ひたる男が來り戸主太七が

久しく病氣に罹り居るより同家の家族に對ひ自分は有名なる濱口熊嶽師の先生にて今森町に歸る途中なるが明日は熊嶽の貴家に來る筈と聞けど弟子の熊嶽に施術を頼むまでもなく自分が治療をして得せんと何やら殊勝氣に讀經めきたるを始め命六圓の施術料を受取り立去つたりと此の手の詐欺に罹らぬ様注意あり

●熊嶽の施術振(一) 今日科學の代である科學の進歩は吾人の信仰を薄らがせ迷信の影を漸時剝奪する即ち今日の人は客觀的に證明された真理の外は何事も信じない又信じてはあらぬのである處が一種の奇術を弄して人間一切の病を治し如何なる不治の難病も即座に其効果を現はし平癒する事が出来るると大言して既に數十日來本縣下に來り濱松袋井掛川烏田と漸時東漸して目下藤枝町に滞在し廣く患者の需に應じて施術して居る彼の濱口熊嶽は今や十日を出てずして當靜岡に乘込み寶壽院に在りて施術すると云ふことを聞いて記者は一日藤枝町に彼を訪ひ養命寺に親しく其施術振りを見た一は其術をありのまゝに報じて讀者の責に任せん爲め一ツには這麼愚夫愚婦を惑はす様な馬鹿々々しい事を觀破して遣らうと云ふ好奇心からである即ち刺を通じて來意を述ぶると早速承諾して書生の案内で此方へと云ふ自分は最初に吃驚したのは熊嶽の風采が想像と實際と大に相違して居たことであつた五十前後の雲右衛門の如に長髪を垂して長い顎髯を垂らして顔色憔悴した仙人めいた人だと思つたに見ると想像とは正反對で彼は本年三十一歳の五分刈頭で鼻下

に八字髯を蓄へた快活な好個の紳士であつた記者が行つた日にはこの養命寺に患者即ち被施術者が約五百人から詰めかけて居た。いざこれより術を行ふと云ふので熊嶽は白衣に着替へ鉢の中に杉箸を投じて之を燃し暫時冥目祈禱をましそれが済むと第一番に術を受ける爲に前に進んだのは脳病患者で十五六の小僧だ。お前の眼は閉じて終つて開かぬ開くなら開けて御覽と云ふと非常に面を垂めて力んで見ても開かぬ開けて遣るバツト熊嶽が言ふと小僧の眼が直ぐに開くを以て彼は口に何事か唱へながら大聲一番すると小僧は臍病が平癒したと云つて急に元氣付き莞爾々々して居る次に出たのは十七八の美人で熊嶽の前に座ると彼は直ぐにお前は月経だろう今日で三日目だなど訊くと美人は面を赧くして左様ですと答へるそれから前と同じ様に口に唱へて患者の局部腹部へ宛て大聲を發しながら打ち下すと患者は最う子宮病は癒つた様ですと云ふ第三番は八ッ位の女の子で付添の母親らしい人が虫歯で困るから抜いて呉れと頼むと彼は例の如く其局部を誦唱して右手で打つ似する。但し彼は自分の手は決して患者の局部に觸れないのである自分は如何なる術を以てするもこれは難義であるだらうと思つて片唾を飲んで見て居た處が不思議なことに何時の間にか歯が抜けて居て小供自身も大に驚いて居た様であつたこの手も觸れずに歯を抜くことに付いて面白い話がある。

●熊嶽の施術振(二) 熊嶽が患者の口中に手を挿入せず歯を自由に抜き取るに至つた動機は彼

自身の語る處に依ると次の如である熊嶽は紀州長島町の名もなき一漁夫の小僧で十四歳まで仕様の無い腕白な入公で常に附近の小供の餓鬼大将とあつて飯時に家に歸る外海の中で水合戦をして濱邊で相撲を取たりして居たが十四歳の時一夜夢に感じ突如として翌朝家出し瀧を以て有名な彼の奈智山に入り此處で實川上人と云へる非凡の人に遇つて其人から術を授けられて居た或日の事であつたこの實川上人は何んと思つたか急に入佛を決して山頂より谷底へ投じ自から身を破つて死んで了つた之を見た熊嶽は非常に驚いて直様師の後を追ひ救助せんとしたが既に上人は粹切れて幽冥遠く隔て遂に又この世の人では無かつた彼は慨然として師の亡き體を眺め暫暗涙に咽んで居たが秋も行く人も逝く自然の力には又如何とも仕方が無いので彼は此の亡體を彼等仲間の習慣たる木の葉を以て蔽はんとした。谷底には牛の臥す如き岩石のみで木の葉は到底得るにやしない其處で仰面て上を見ると遙か上方に木が生へて居るので石を拾ひ的を付けて投げると石は外れて的中あかつたが木の葉はハラ／＼として落ちて來た彼は其不可思議な現象に呆れて此度は石も投げず只手を以て打つ似をしたすると前の如く片々として落葉する彼は此時思つた自分には遠大な神秘力があるこの法を以て人間の總ての病氣を必ず落すことが出来る飛ぶ蜻蛉も落ちれば人の齒を抜けると自信して後に實行して見て果して成功したのである云々と其眞偽如何は今此處に論ずる必要は無いが兎に角彼濱口熊嶽は其施術に現はれたる結果を見ても非凡の術を使う人だと

云ふだけは何人と雖非認する事は出来まいと思ふ又彼が漁師の入公であつた事も事實らしい術其ものに於ては日本一かも知れん然しなから總ての科學に於ける智識は彼の妻君に一步を譲つて居る妻君は彼に取つて唯一の良秘書官である妻君は大川女學校本年の卒業で今年十八である大分活柄が横道に入つたがそれから次に出たのは十八九の太肉の常に罪もない微笑を浮へて爲る娘で四年前に流麻質斯を思ひ其後左足が曲がつて立つ事の出来なかつたと云ふ患者で之で三回目だが昨日は柱に掴まつて立つ事が出来ましたと言つて付添の母親と共に嬉しかりさうに笑つて居るよしそれでは今日は歩かして遣ると云つて熊嶽は例の呪ひをやり大聲一番膝關節に打ち下す似ををし付うだ歩けるだらう歩いて御覽と言ふと思者は立あがつた満場の人は片唾を飲んで見て居ると四年間立たざる婦人は杖もさく付添人もさく歩行をした本人の顔色付添の親の心はその時せんだつたらう

自分は今茲に當市に於ける文明的魔術者暫く魔術と云ふ濱口熊嶽が自ら説明の出来ぬ感應的作用に依る施術振りを書く前に當つて先づ彼が經歷の一般を略記したいと思ふ紀州北牟婁郡に千五百戸を有する長嶋町と呼ぶ一漁師町がある前方は渺々たる太平洋後方は深林繁き山又山で町外一步すれば即ち山紫水明白沙青松の勝天地である熊嶽はこと長島町に今より三十一年前始めて孤々の聲を擧げて浮世の人となつたのである彼とて人も人である以上人並に親は持て居た、けれどもそ

の親は物質に於て甚だ衰へた生活であつた父は長松と云つて船底一枚が地獄稼業の漁師で母はあつと云ふ花ならばうば櫻も過ぎて既に散りかけた四十九の中婆さんで彼熊嶽は一人の兄弟も最初から持たぬ獨りぼつちである熊嶽幼名を熊嶽と呼び家は代々禪宗なるに早や五歳の折眞言宗の經文を空誦して人々を驚かしたと云ふ兎に角彼の容貌を見も幼時から非凡で在た事は解る七歳にして土地の小學校に入學したが彼は普通の生徒と運動場に旗取競争や鬼子つ子をして遊には餘りに早く智識が發達して居た小學校教員から二に二を加へて四となる數理の説明に聞くには餘りに彼の頭腦は現世を超越して居たから學友からは總ての侮蔑を浴せられ而して仲間はずれとして遊んで呉れなかつた教師は彼を見るに冷かにして繕挺を忍鈍を兒童として居た、けれども熊嶽の熊嶽は決して失望しなれば又悲しくも無情くも思はなかつたそれは彼が當時既に一種の偉大なる或るものに憧れて居たが爲にそんか一些事に關する丈の餘地がなかつたからである彼は朝早く起きるや海岸に出て、千古變らざる波に對し幾多自然の教訓と默示を得學校より帰宅するや山林に走りて日没の天を仰ぎ人生の眞意義を求めんとした少さい熊嶽の胸に人生觀の起つた時彼は現世の悲哀を感じて暗然として涙を其頬に傳らした同時に益々眞宗の奥義を研めんとして僧仰の念は一層強くなつたのである吁この小弘法大師はかくて學業に強めず學友よりはうとまれ遂に間もなく學校からは退學せらるゝに至つたのである

かくて學校を退學されたる熊藏の熊藏は少しも之を悔ひず却つて其眞言に接するの好都合を喜んで居たのであるけれども彼の胸中には人生の歸趣に對する大なる疑問の結ばれて解けず人生の眞義を知らんとして頗る煩悶した或日のこと彼は寄せては銀の玉とバツと碎けて飛ぶ汀の巖に腰打ちかけて暫し冥想を凝らして居た人は常に其頸や老病死の刃を置かれつゝあるに哀なや世の人之を思はずして幻の快樂に耽る若し花何時までも開き人また永久に病まんならば如何に現世は樂しかるべきにされど人は水と共に逝きて歸らず愛する者愛さる者又共に亡ぶべき運命である女の誇る美貌も一朝病みては忽ち顔色憔悴しうたかたの夢と消へて見る影もない哀れな様と變る吁こいつ此の儘に捨て、は置かれぬ何んとかして救ふ道を講じて遣り度いものだと其時切に思つたのであるそれから春過ぎ夏去つて熊藏十四の冬一夜町内の東文藏と云ふ家に招かれて同夜遂に其處に一泊する事となつた夜半夢醒めて四邊を見れば枕邊に有明の淡光寂しげに音聞く窓外に松籟の音颯々たるを彼はそれより遂によく眠らず夜明けに及んでとろ／＼と目蕩や夢に老翁枕頭に忽然として現はれ奈智山に入りて眞言秘密の法を修めよと告ぐ睡眠醒めて翻然として夜未だ明けざるに急ぎ家に歸りて出家の由を書き遣し遂に奈智山に入つたのである茲に實川上人と遭ひ弟子となりて秘法を學ぶ事三年十七の春其秘法を究め得て以て今日日本一の施術者たる所以で、彼が當市に於ける施術振りを見るべく自分は一日寶壽院に車を飛ばすこととした

施術時間は午前七時から同十一時迄との觸込に患者の多數は定刻より稀々と詰掛け七時過には既に定員に滿ち翌日を期して歸る者も夥多しき有様で乳汁のない婦人に何言か唱へてバツと一聲呼ぶと乳汁が迸ばしる乳汁なさを愛ひて居た三四人の婦人は異常の感に打たれ喜びと不思議とに充て控へ居て齒の痛みに惱まされし子女等よりは手をも指をも觸れずして瞬間に一のかげ聲と共に抜落すなどは實に自分が魔術であると云ふ所以である、腦病で頭部の痛むものヒステリーで鬱々たるものは即座に痛みを去り精神を爽快ならしめ或は腰の痛むもの僂麻質斯にて手足の不自由なるものを一句呪唱の裡に健全なる体に復するのである秘術とは云へ人間業とは思れぬ其間法師自身は莞爾／＼し或は微笑を湛へてさも得意然として居る

三日は朝來天氣だつたので七時に施術を始めると云ふのに七時半には既に定員となつて表の入口を閉ぢねばならぬ盛況であつた入口には幾臺かの病者を載せた空俵が並んで居るさしも廣い大廳敷も多くの患者を以て立推の餘地だに無く其間に於て例の白衣の熊藏法師は破れ鐘を叩く如き大聲に叫んで諸君はそんかに騒いでは何難談をするなと云ふに未だ話すがある其人は料金二十五錢を持つて此處を出て行つて貰いたい猶止めぬなら私はこれで今日は止めにすると言つて仕うも餘り騒々しいと應じないと呟やく扱て法師の前に出たのが八九歳の小女で齒が痛むから止めて呉れと云ふ其處で呪言一番患者の指を以て其の齒を軽く觸らしてバツと一聲熱心に呼んだかと思

ふと其齒は既に抜けて居たけれども未だ齒揃が悪いので直して遣ると云つて同様患者の指で齒を二三回撫てると茲が得意の秘法で綺麗に揃つて了つた其次には海老茶袴を穿たせ京さんと云ふ十三四の女の子が前に代つて出る耳が頗る遠いからと云これも一回の施術で其聴力は驚くばかり敏くなつた試みに遠くの方で京さんと呼ばせさうにはいと應へる次に鼻の脇にある黒子まで抜取て貰つて歸つて行つた此度は十八九の妙齡の婦人て右方の目が霞む眼病患者である眼を閉じよパツ開け付うだ最う霞まないだろうと訊くと猶且霞んで居ると云ふ其時群集の私語は合して室内は非常に騒々しい法師は又立つて諸君が餘り騒々しくするから吾輩の術は感應しないと宣言して更に施術して付うだと訊くと明然しましたと答へて退く自分は出社時間も近いので此時此處を去つて了つた自分は彼の施術振りを見て一種の催眠術が含有して居る丈は發見したが之を確然として言ひ現すことの出来結極文明的魔術と思つた

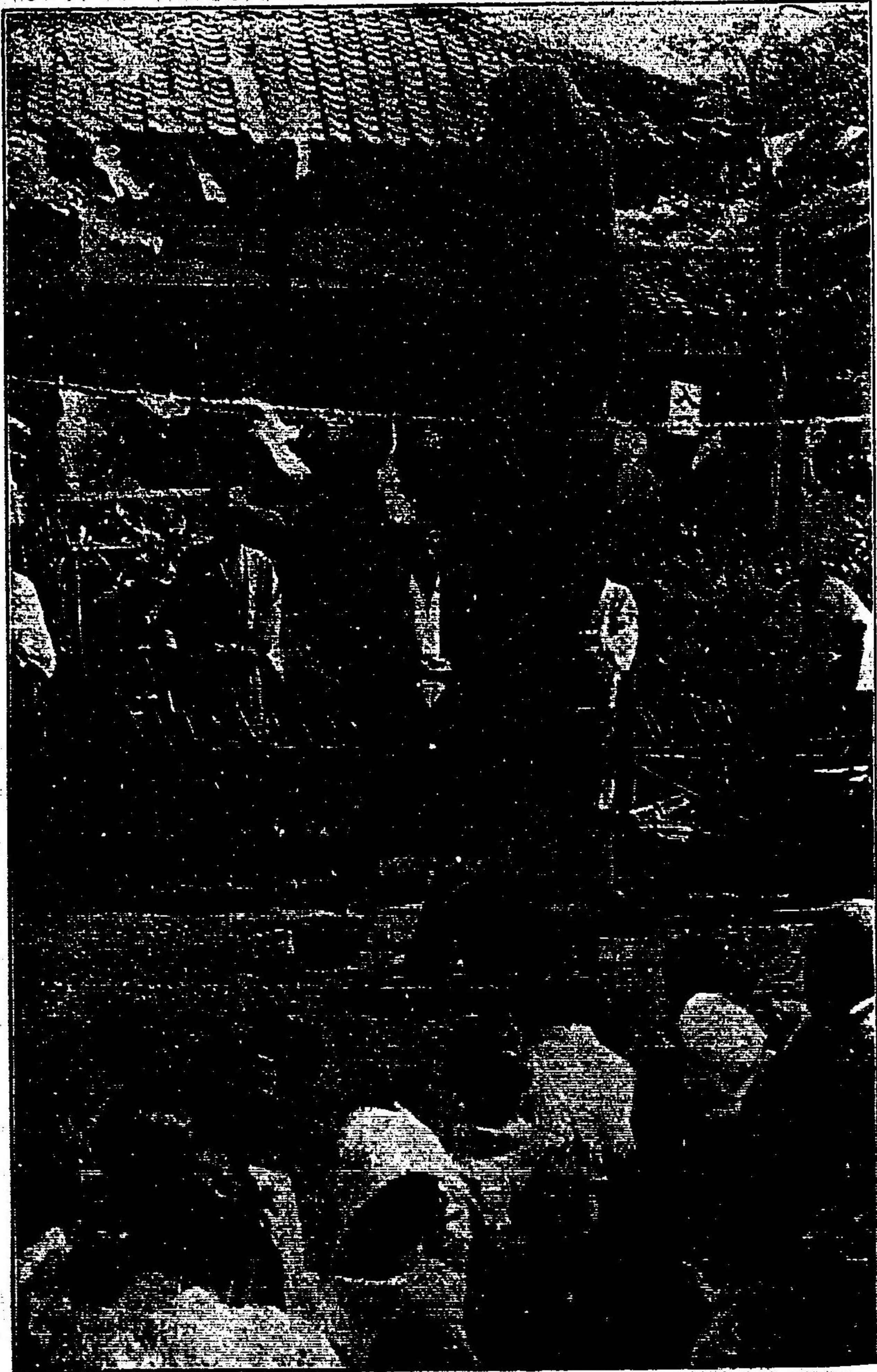
●熊嶽と吉原町 施術者濱口熊嶽師は目下吉原町に滞在施術中なるか依頼者非常に多数にて午前一時より患者續々掛掛け來り住職も大に困ずる有様にて十六日より徹夜にて本堂に番人を置く等仲々騒ぎありと而も日々定員に遅れて約四百人の患者は空しく歸宅する由尙同町有志者十數名は去る十五日熊嶽一行の爲め成功祝賀會を催したりと右の有様あるを以て師は明十八日より向ふ二週間日延を申し來る二十四五日頃より大宮町大頂寺にて施術すべしと

静岡新報記事

○寶塚院に於ける一時間濱口熊嶽の施術を見る 寶塚院は相變らず緑日の様に賑やかだ熊嶽の施術の如しと云ふもの半信半疑の者疎々と寄集つて居る、記者は人波をわけて施術場所の横に坐つた殆んど一寸の隙もない熊嶽を圍んだ十重二十重の群集は半疑半怖れて眼をみはつて居る熊嶽は白装束で横に水を入れた金盃を置く丈だ、多くの患者は前後を争つて其前に入る熊嶽は時々聲を出して騒々しいのを叱咤する、數百人の多數であるから悉く覺へて居ないが老たる若き多くの男女はあらゆる病氣を網羅してやれ脚氣でムる胃病でムる頭痛がする足が痛む腰が彎らぬと各々疾患を訴へては熊嶽が何やら呪文を唱へて喝と氣合を入れるのを受けて引下る、就中乳が出ない若い女、齒が痛む者、疣黒子を取る者杯は眼前で奇効を奏するから夢かと悦ぶ、某中尉夫人、縣廳の某夫人を始め五六人の若い女は一滴も乳が出ないのが、熊嶽の前で一二分間呪文を興へられたかと思ふと左右の乳房から龍吐水の様に進るので涙を出さん計りに悦んだ、十二三の少女が困難な奥齒も三十計りの妻君が齒も一喝の下に抜けた、胃病や脚氣は即座に効顯が見へぬから解らぬが最も群集を驚かすのはこの乳と齒と黒子である、熊嶽はこの間に如才なくどうだくと鼻を高くする、實際これは意張られても仕方がない、と思ふ時群集の内て呼と聲をあげた、四五

人の人が颯と立つ見物の一人に癩痢が起きたのだ、騒ぐに及ばないと熊嶽が座を立つて寝かした前て呪文を云ふと正氣づいた、立つて見ると大喝する、癩痢男はボカンと立つ、己が封じてやると歩いて歸れと云ふ、男はノコノコ出て行つた群集は更に感心した、かくて種々ある病人は更るゝ施術を受くるのである、記者は感應術を基礎とした功妙な神秘的手腕に驚いた、思ひ出さるゝは師範學校の故桑原君の事である、精神靈動と云ふ事を唱道したが熊嶽もこの精神靈動が土臺であるのだ、惜むべし好漢粗野で舉動言語が乱暴だから興行的で如何にも体裁が悪い、然しながら兎に角一度其施術の模様を見て置くは、事であらう、近時かゝる心理方面の研究が盛んになつて來たのは記者も喜ばしい事と思つ

○濱口熊嶽の施術 濱口熊嶽法師が當市寶臺院に於て毎日午前中施術する事は既報せしが非常の盛況にて定員の二百名は倍以上の群集を見に至り時から宝臺院は縁日でもあるやの觀あり記者は施術の參觀を爲さんと赴きしも群集の雜踏一方ならず加ふるに編輯事務多端なりし爲多くを見るを得ざりしも催眠術應用の暗示が極めて巧妙に應用さるゝを認めたり神經系統の病が心理作用によつて救治さるべきは不合理の事にあらず記者は更に悉しく施術の模様を見るの機會あらば再び讀者に報道すべし腕車十數臺門前に待てるあり下駄草履の椽に山を築きたる杯其盛況振つてる事一通ならず驚くに堪へたり



町原吉郡士富縣岡靜
景實ノ行執摩護立湯ヲ於=所張出寺稱唯

人の人が颯と立つ見物の一人に癪痾が起きたのだ、騒ぐに及ばないと熊嶽が座を立つて寝かした前て呪文を云ふと正氣づいた、立つて見ると大喝する、癪痾男はボカンと立つ、己が封じてやると歩いて歸れと云ふ、男はノコノコ出て行つた群集は更に感心した、かくて種々ある病人は更るゝ施術を受くるのである、記者は感應術を基礎とした功妙奇神秘的手腕に驚いた、思ひ出さるゝは師範學校の故桑原君の事である、精神靈動と云ふ事を唱道したが熊嶽もこの精神靈動が土臺であるのだ、惜むべし好漢粗野で舉動言辭が乱暴だから興行的で如何にも体裁が悪い、然しながら兎に角一度其施術の模様を見て置くは、事であらう、近時かゝる心理方面の研究が盛んになつて來たのは記者も喜ばしい事と思つ

○濱口熊嶽の施術 濱口熊嶽法師が當市寶靈院に於て毎日午前中施術する事は既報せしが非常の盛況にて定員の二百名は倍以上の群集を見に至り時々の寶靈院は縁日でもあるやの觀あり記者は施術の參觀を爲さんと赴きしも群集の雑踏一方ならず加ふるに編輯事務多端なりし爲多くを見るを得ざりしも催眠術應用の暗示が極めて巧妙に應用さるゝを認めたり神經系統の病が心理作用によつて救治さるべきは不合理の事にあらす記者は更に悉しく施術の模様を見るの機會あらば再び讀者に報道すべし腕車十數臺門前に待てるあり下駄草履の椽に山を築きたる杯其盛況振つてる事一通ならず驚くに堪へたり



靜岡縣富士郡吉原町
唯稱寺出張所=於湯立護摩執行ノ實景

○偽熊嶽の先生捕縛 磐田郡上淺羽村淺名五十七番地牧野本吉長男良平(二十)が永らく病瘵にあるを奇貨とし自ら濱口熊嶽の先生なりと稱し怪氣なる男が金六圓を祈禱に事寄せ詐取し逃走せし事は此程の本紙に記したるが右は更に去六日濱松町天神町を徘徊中全署の手に取押へられ嚴重の取調によつて自白したるが全人は廣島市猿樂町元僧侶渡邊文次郎(三十)と云ふ者にて三重愛知兩縣を全様の手段にて荒し廻りたる曲者なりと云ふ

○熊嶽の奇特 目下寶壽院にて施術中の濱口熊嶽は静岡赤十字社支部へ金子若干寄附せしよし奇特のことと云ふべし

○下田町と濱口熊嶽 濱口熊嶽は目下松崎町に於て日々數百人の施術を爲し居るが五日間を二日延期し十五日よりは下田町泰平寺に於て施術すべしと云ふ従つて沼津町は十四五日頃初日の寄會場は全地西光寺なりと(九月十二日)

○濱口熊嶽の大繁昌 伊豆に於ける熊嶽は大繁昌あり本日より松崎を去つて下田に向ふ沼津は來月一日よりなりと尚松崎町にては全地の素封家依田善六氏の信用を得全氏の宅に招待されたりと云ふ(九月十六日)

○熊嶽婦人會へ寄附 伊豆に於ける濱口熊嶽は下田町にて非常の盛況を極はめしが全町は二十六日限りにて廿七日より四日間は稻取村善應院に於て施術する等なるが全人は今回愛國婦人會静岡支會第一回總會へ金五十圓を寄附したり(九月廿五日)

○熊嶽の美舉 當市寶臺院に施術中の濱口熊嶽は昨日赤十字社及び武徳會各支部へ金廿五圓宛合
て五十圓寄附したり又全人は別項廣告にある如く一週間日延を爲たるが相變らず施術を乞ふ者願
る多しと

○濱口熊嶽氏の繁昌 黒子や疣を抜取を以て名高き濱口熊嶽は目下掛川町に居るが中々の人氣に
て尙去十九日は如才なく全町の通信員故舊等を招待して宴會を開きしと

○濱口熊嶽師の寄附 寶臺院にて施術中なる同氏は昨日赤十字社及愛國婦人會へ第二回寄附とし
て各金十圓宛を差出せり

○熊嶽と岩淵 毀譽交々盛んする例の濱口熊嶽は其後吉原町唯稱寺に施術し門前市をなすの盛況
なりしより別項廣告の如く日延したるが尙全地終了次第岩淵有志者の招聘に應じ全地に三日間施
術すべしと云ふ尙全人は静岡軍人後援會へ金十圓を寄附したりとは鬼に角毛色の變つた男なり

濱口氏の感應術と近世科學

寺崎斗南

孔子は怪力亂神を語らずと云うて、常識の判断で付き兼る事柄は總て排斥したものである、然し
常識判断なるものは、當代の科學思想から来るもので、科學なるもの元來總て不完全で、常に進
歩し變化しつゝあるものであるから、従つて常識判断なるものも、時代と共に移動し變化するも

のである、孔子の時代に今の電氣や蒸氣の動を語つたからば、彼は正しく之を怪力亂神として排
斥したのである、濱口氏の感應術も十數年前には稍もすれば世人の疑惑を受け當局者から無理非
道ある迫害を受けた事もあつたが、科學の發展と常識の進歩は次第に世人を動して物質的現象以
外に心靈的現象の何物たるかを幾分か了解せしむる事となつて、濱口氏の感應術は漸く上流社會
の學識あり地位ある人に確認さるゝ迄になつた、これは正しく時代の進歩として慶賀すべき事と思
ふ、

濱口氏の一喝に病氣を直す力があるとは一寸受取れぬ話であるが、茲が神妙不思議で、昔の武術
家が槍光で米俵を手毬にとつたのも、日蓮上人が念力で大石を空中に吊り上げたのも、一種の氣
合術である、彼の濱口氏の一喝には非常なる力が満ちて居る、彼が滿身の心靈的勢力はこの一喝
の内に籠つて居るので、一閃の電光が絶大の力を現すが如く濱口氏の心靈は患者の心靈と一致し
合体して茲に治療的效果を現するのである

凡る精神と肉体との關係ほど親密なものはない、精神の持ち方一つで肉体の病氣に大影響を及ぼ
す實例はいくらもある、諺に病は氣からといふは、この意味を現したものである、醫學博士大村
德兵衛氏は其の著書に於て「病は氣からと云ふ實證」を左の如く列擧して居る

(一)精神の消化器に及ぼす關係 氣一つで消化器能の働が活潑となつたり或は鈍くなつたりす

る、酸味の強いものを見ると唾液の分泌が急に激しくなつて来るのも精神作用である、友人と愉快に話しかから食ふと幾らでも食へるが、獨りて淋しく食ふと食が進まないといふのも心配事があるといふのも向腹が減らぬといふのも又喜怒哀樂の極点に往くと全く食慾がなくなるといふのも皆精神作用から来るのである

(二)精神の呼吸器に及す關係 恐怖の念が激しくなつて来ると、呼吸が微かになつて来る例へば夜中の山越などをやる時には殆ど息ほどに呼吸が少くなる、余り心配すると肺病に罹るなどと俗に言ふのは精神作用で呼吸器の働を鈍くすることが幾分か關係するのである

(三)精神の血行に及す關係 驚いた時には動悸が激しくなる、怖れると顔が青くなる、瀧しくて顔が赤くなる、凡て精神作用が血管運動神経に影響を及ぼすのである

(四)精神の神経系統に及す關係 火事の時に筋肉の力が非常に強くなる、吃驚して了つて小便の出なくなることもある、小供が恐ろしく叱られて動けなくなる事がある、母親に心配事があると乳が急に止まる事がある、即ち精神の作用で神経が痙攣するのである、卑怯者が驚て腰を抜かすのは矢張り同じ事である「つとめ酒は酔はぬ」といふのは實際で、制止神経の作用である

(五)精神の病體に及ぼす關係 熱病患者などは、家族の訪問に依て少し面白くない事を聴かされる時、熱が昂る、糖尿病患者に就て之を見るに相續師などは得意の時になると尿中の糖

分が減るし、失意の時になると糖分が増して来る故に病人に最も必要なることは精神の安寧と慰安である

木村醫學博士は更に進んで、精神と細胞の關係を論じて居る、曰く

「精神が能く不撓であれば身体の細胞が活動して抵抗力が益々来る、彼のミュンヘン大學の教授ベッテンコーフェルが助手のエンメリツヒと共にコツボ氏の學說に反對して虎列刺の微菌を嚙み下したが彼には虎列刺病が感染しなかつたといふのも、全く精神の自信力が身体の細胞に大關係を有する確證である、精神が引立つて居れば身体の細胞までも皆活動して居る之に反して精神が萎縮すると身体の細胞までも皆萎縮して仕舞うのである」と

即ち濱口氏の一喝は患者の精神に一大感應を興へ其の精神的感應は直に肉体の細胞に効果を現して来る、かくて濱口氏の施術は到る所に成效を見るのである、若し今日濱口氏の施術を以て怪力亂神の一種ありといふものあらば、それは正しく近世科學の何者たるかを解せぬ徒輩である

精神感應術は日本に於て濱口氏の研究されて居るのみならず、英國米國に於ても目下盛にこの種の研究を行ふ學會が出来て居る、彼の一堂の内に種々ある現象を集むるテーブル・コング、遠方の事柄を知るクレヤツヤクス、心で計り心で讀むサイコメトリー、互に思想を通はせるテレパシーの如き、未だ研究中にはあるが一種の精神感應術として將來成功すべきものである、日本の

濱口氏も遠からず其の研究の結果を携へて歐米に漫遊するといふ事であるから、東西西洋の實験を集め茲に世界の感應術を大成する時期も近きにあるであらうと思ふ。要するに政治界に於て權利思想や議院制度に關する議論が古くあつて、今後は如何にして社會大多數の人間に幸福を平分すべきかといふ社會問題が將來の主題となるが如く、學術界に於ても一切の物質的現象は十分に説明されたから、今後は大に心靈界の研究に力を盡し物質と心靈との合致を明かにする事が主たる問題であらうと思ふ。濱口氏が一種の靈的勢力を以て精神研究に従事し其の得たる収益を擧げて社會救濟事業に投すべしと揚言せる一事は正しく時代の二大要求に相當するものとして吾人の歡喜に堪へぬ所である。

名古屋新聞二遠附録

(明治四十一年四月二十一日)

○熊嶽に關する記事 先月十八日の附録紙上に掲げたる熊嶽が札木多田屋の小鶴を落籍したりとの記事につき昨日熊嶽師來訪ありて云ふや事實全然無根なり斯の如き記事を掲げられては今後營業上に關するのみならず迎宴上にも大に差支を來す次第されば取消ありたしとの請求に付き該記事を抹消するもの也

静岡公報

四十一年四月二十五日

○濱口師の施術 濱松町玄忠寺に於て例の施術をなせし濱口熊嶽師は去る廿二日より向ふ一週間磐田郡山名町威福寺に於て毎日午前七時より全十一時まで諸病患者の施術をなしつゝありと

静岡新聞

四十一年四月二十五日

○濱口熊嶽師來る 濱口熊嶽は去る廿二日より向ふ一週間磐田郡山名町威福寺に於て毎日午前七時より全十一時迄諸病患者の施術をなしつゝありと

濱松新聞

四月二十四日

○濱口熊嶽師の施術 去月濱松に於て施術しつゝありし濱口師は暫らく郷里へ歸省せられ居りしが今回又去る廿二日より袋井町本町觀福寺に於て一般の施術をなし不相變日々千人以上の盛況にて二週間同地に滞在し掛川に出て静岡に赴かるゝと云ふ本社特派員同師を訪ふて記事を書す

静岡公報

四十一年十月八日

○エイエツ治療、掛聲で萬病を治す 病氣は必ず醫師に依つて投藥を乞ひそれて全快するものだ

と思つて居た時代は既に過ぎて終つた人間の總ての病氣は藥で治するよりも精神治療を要すべきである云ふ理由が発見されて以來此精神治療法は西洋の文明國は勿論今では東京其他の地方にも大勢力を有する様になつて來たのである即ち一例を擧ぐれば東京本所區精神學院の如き又目下伊豆伊東町に施術し居りて濱松町を始め本縣の各町にこの精神治療を施した事のある如きこれである云々

静岡民友新聞 五月五日

○濱口熊嶽の懇親會 去月より磐田郡山名町袋井の觀福寺に於て施術を志し不思議な秘法と大氣焔とに素人目を驚かして毎日新患者五六百名宛殖へ來るとは道に熊嶽の手腕なりと讚め置くより外はないが彼れは去る二日の夜同町屋料理店に同地方の有力者を招きて懇親會を催し會する者數十名中々の盛會ありしが殊に酒宴に移りて人々の隠し憂あり中にも熊嶽先生見かけに依らぬ藪人にて其の内十八番のカツポネ踊りの如きは見るもの、舌を卷かせしと愈々以て隅には置けぬ男と云ふべし

參陽新報 明治三十八年十二月十日記載

明治十四年三月三十日
熊嶽事務所於施術中



○天一——熊嶽——東洲——蒲城の一紳士として、關西の劍客として、また新聞社々長として多面に亘り多角に展び潤達にして任侠の風骨ある東洲村上光實氏は、目下當地新福座に開演中なる大奇術師服部天一とは二十余年來の知己で、最も親しい間柄である爲、天一が本縣へ巡遊し來る毎に必ず兩氏相會飲して舊情を談ずるのが常であつた、左れば今回も天一師は當地に乘込む前日に松坂へ降りて川井町に東洲氏を訪ひ相携へて愛宕町廣月樓に登り且つ語り且つ酌み淋漓飲宴大いに歡興を盡したのである、然るに東洲氏は當時松坂町に滯留して例の祈禱をなしたつゝある濱口熊嶽法師の事を想ひ起して直に其席へ法師を招じ天一に紹介したので茲に端なくも劍師、奇術師、祈禱師の三角同盟を形くつた、そこで候ち天一の歐米漫遊談が出る、熊嶽の法力自在論が現はれる、氣焰と氣焰の高丈中へ東洲氏の快活な調子で放談縱横といふありさま桃圖の三國誌と水滸傳とを世話に直したとも評す可き奇遇で、凄まじいと言ふ事ありあつた。而かも其席上東洲氏の提議により、三人が義兄弟の盃をしたとの事て松王なる兄は天一、梅王なる中兄は東洲櫻丸なる弟は熊嶽である、尙其夜天一と熊嶽とは明年七月頃俱に佛都巴里に渡航せんとの約をも結んだ、其翌三日、三人は打連れて來田し北村屋支店に投じた夜に、東洲氏より書を以て本社のお歸を招かれたが、已むなき來客の爲に遅刻して遂に其席へ臨む事が出来んだ爲四日の夜禮奉享の宴席で東洲氏と天一師に前夜の談をしたのであつた、義兄弟の奇談、あらくザツとかくの

通り〇(無名師)

○惡漢部 熊嶽の先生と偽り三重縣及び愛知縣を荒し數百圓を詐取して巡りたる渡邊文次郎(外九秀長とも言ふ)名目を以て數多の信者に對し熊嶽の先生なりとて金錢を貸り行衛不明の處彼れも天の罰により今回靜岡縣磐田郡袋井町に於て左記の手段にて淺羽村字淺名牧野多吉方にて熊嶽の師と申し金六圓を詐偽して逃走の處熊嶽書生に觀破され今回袋井警察へ熊嶽氏の告訴により全警察署へ引致され濱松地方裁判所へ護送され當裁判所に於て刑法第三百九十條に依り五月十五日重禁錮三ヶ月罰金五圓監視六ヶ月に處せられたり信者諸君に斯の如き惡漢には注意すべし

感 謝 狀

不肖等貴地へ出張致候節ハ特別ナル御幹旋ヲ蒙リ御厚意ノ段奉鳴謝候
尙無窮ノ御厚情ヲ垂レ給ハンコヲ奉祈候

濱 口 熊 嶽 他

事務員一同

御盡力ニ預リシ御芳名左ノ如シ

和歌山縣新宮町
全
全
全縣田邊町
三重縣尾鷲町
全
全
和歌山縣古澤町
全
三重縣佐原村
全 綿村
三重縣古和村
全引本町
全松坂町

井野 德右衛門氏
尾崎 元吉氏
山本 清五郎氏
丸田 熊男氏
岡本 竹松氏
別當 常次郎氏
谷口 常太郎氏
岩崎 勘藏氏
土山 磯兵衛氏
増田 留吉氏
前納 熊吉氏
西村 鶴吉氏
久 屋氏
濱田 甚六氏
金谷 誠次氏

三重縣松坂町
全相賀村
愛知縣師崎町
全半田町
全瀬戸町
全
全有松町
全全
全豐橋町
靜岡縣袋井町
全島田町
全掛川町
全藤枝町
全靜岡市

長谷 川氏
鹽 崎氏
若松 屋氏
野村 熊雄氏
加藤 仙三郎氏
加藤 藤與八氏
加藤 深次郎氏
加藤 彦一郎氏
山口 喜三郎氏
高柳 安兵衛氏
島津 三四郎氏
淺沼 吉太郎氏
村上 忠種氏
川島 宗寺氏
川島 喜代藏氏

候事 行法加特許可

肥伊國比牟婁郡長島町
三百七拾七番地

濱口熊藏
法名熊嶽

明治三十三年十一月一日

印

眞言宗醍醐派管長

一等教師大僧正 和氣宥雄

補權律師

濱口熊藏

明治三十三年十一月一日

印

眞言宗醍醐派管長

一等教師大僧正 和氣宥雄

全靜岡市
全由比町
全吉原町
全大宮町
全下田町
全松崎町
全

楮原政義氏
和田茂夫氏
近藤昌平氏
長谷川一和吉氏
飯田香松氏
依田善六氏
土屋四郎兵衛氏

紀伊國比牟婁郡長島町
三百七拾七番地

濱口熊嶽

明治三拾八年六月拾五日
日付懲戒解除願ノ趣聞
届候事

明治三十八年七月廿日

眞言宗醍醐派管長
一等教師大僧正 和氣宥雄印

濱口熊嶽

授神子准權訓導

明治三十八年十一月十四日

神習教管長正七位 芳村正乘

祈禱禁厭施行免狀

三重縣平民 濱口熊嶽

惟神之道ヲ神習ヒ其神事内傳
第一科卒業自得ヲ証認ス因テ
祈禱禁厭免許規約ニ照據シ此
神事八等免許狀ヲ授與候事

明治三十八年十月十四日

印

神習教管長正七位 芳村正乘

證

一 人民自由術
右授受ケ候上ハ滿三ヶ
年間決而他言致間敷候
事ヲ誓約ス

明治三十八年六月拾九日

姓名

左之通リ

濱口熊嶽殿

人民自由術授受者

- 明治參拾六年六月拾九日 別當 善吉
- 明治參拾六年六月拾八日 尾崎 元吉
- 三重縣北牟婁郡九見村
- 明治參拾六年九月三日 川上 芳助
- 和歌山縣新宮町
- 明治參拾六年六月拾七日 佐藤 豊太郎
- 和歌山縣東牟婁郡三津村
- 明治參拾六年六月拾九日 浦木 清太夫
- 兵庫縣傾磨村
- 明治參拾六年九月廿六日 天野 繁藏
- 三重縣北牟婁郡九木村
- 明治參拾六年九月三日 宮崎 慶治郎
- 和歌山縣新宮町
- 明治參拾六年九月拾七日 柳 雄四郎
- 三重縣北牟婁郡九見村
- 明治參拾六年九月廿三日 竹田 仁右衛門
- 森 萬壽雄
- 明治參拾六年六月廿日 愛知縣半田警察署
- 櫻井 伊三郎
- 全 四拾年七月

全 四十二年 吉村 ギン

赤丙第三四號

客年十月中當福井支部事業費中へ金拾圓御寄附
相成候ニ付今回本社長ヨリ別紙之通リ贈狀送致
越候ニ付傳達申進候也

明治三拾八年一月廿一日

日本赤十字社福井支部

濱口熊嶽殿

本社忠愛ノ主旨ヲ協賛シ金拾圓ヲ支部事業費ト
シテ寄贈セラル仍テ 總裁殿下ノ台詞ニ達シ
其厚志ヲ謝ス

明治三十七年十一月十五日

日本赤十字社長

伯爵松方正義

濱口熊嶽殿

證

一金五圓也 武德會義金

石領收ス

明治三十七年十二月七日

地方委員 高橋幸之進

濱口熊嶽殿

領收證

一金五圓也

右ハ本團ノ趣旨ヲ賛シ御寄附セラレ
タル金額正ニ領收仕候也

明治三十八年一月四日

奈良縣宇智郡義勇團

濱口熊嶽殿

五甲第一二六號

軍資獻納金拾五圓ニ對スル領收証紙
紙及送付候也

明治三十八年二月三日

山口縣內務部

岩國町松聲館ニテ

濱口熊嶽殿

五甲第一六一號

囊ニ出願ニ係ル軍資獻納金當廳ニ於
テ納入方取計候條別紙領收証及送付
候也

明治三十八年二月十四日

山口縣內務部

玖珂郡柳町凌波館ニテ

濱口熊嶽殿

證

一金貳圓也

右本會々費正ニ收納候也

明治三十八年二月 日

神宮報國會大本部

濱口熊嶽殿

濱口熊嶽

特別會員證

神宮報國會大本部

濱口熊嶽

五等衣体着用許

可候事

明治三十三年一月一日 印

眞言宗醍醐派管長

一等教師大僧正 和氣宥雄

無何有之郷

爲熊嶽師囑

元陸軍々醫總監

松本順書

蘭

松本順印

修法入門願

光義貴殿之真言三密之秘法に感勵し修法仕度候間奉願候徒弟として入門奉願候條御聽許被下入門之上は諸規則等嚴重相守可申保証連署此段奉願候也

明治三十五年六月二十四日

京都府紀伊郡堀内村字堀区七十一番地
東京市四ツ谷區元鯉河橋町五十九番地
寄留士族

元書記官警部長 從五位勳六等 財部 羌 印

保証人 正五位 本田親之 印

濱口熊嶽殿

貴殿の門人と相成候上は御師傅相成候件々決而口外致聞敷依而誓書如件

明治三十六年一月十九日

岩村光俊男 岩村 薩馬 印

濱口熊嶽殿

近士濱口熊嶽

補教師試補

明治卅二年十月卅日

真言宗
長者印

真言宗長者大僧正三神快運

明治三十七年度第三號六月ヨリ
軍資献納及諸寄附

三重縣志摩郡鳥羽町大字鳥羽町
百五十五番屋敷兵庫縣平民

濱口熊嶽

一金拾五圓也

右軍事費補足の趣旨を以て献金の義被聞届候事
明治三十七年六月三日

三重縣知事

從四位勳三等古莊嘉門印

領收証

一金五圓也

但明治三十七年五月より向ふ三ヶ年間毎月
金五圓宛寄贈之内當月分

右正に領收候也

明治三十七年八月八日

紀南新聞社印

濱口熊嶽殿

領收証

一金拾圓也

右は恤兵婦人會へ寄附候事感謝の至りに御座候
明治三十七年三月一日

恤兵婦人會事務所

濱口熊嶽殿

領收証

一金五圓也

右正に領收候也

明治三十七年八月七日

勢陽新報社印

濱口熊嶽殿

一金拾圓也

陸軍恤兵部恤兵金出納官

陸軍一等主計 土居楠枝印

濱口熊嶽殿

記

一金五拾圓也

但恤兵義捐金

右領收候也

明治三十七年三月二日納の分

發起者 高知武揚協會印

濱口熊嶽殿

領收証

一金五圓也

但寄贈金之内六月分

右正に領收候也

明治三十七年六月十日

紀南新報社印

濱口熊嶽殿

記

右御寄附相成正に領收致候依て爰に感謝候也
明治三十七年六月八日

愛國婦人會

三重支部長

古莊志佳子

濱口熊嶽殿

三重縣度會郡宇治山田町

大字古市旅驛大安方平民

濱口熊嶽

一金貳拾圓也

右軍事費補足の趣旨を以て獻金の義被聞届候事
明治三十七年六月十三日

三重縣知事

從四位勳三等 古莊嘉門印

證

一金貳拾圓也

但恤兵寄附金

右正に領收候也

明治三十七年五月九日

一金拾圓也

右御寄附相成正に領收致候依て爰に感謝候也

明治三十七年八月二日

愛國婦人會三重支部長 古莊志佳子印

濱口熊嶽殿

一金貳拾圓也

右寄附相成正に領收致候依て爰に感謝候也

明治三十五年 月

德島育兒院

濱口熊嶽殿

三重縣阿山郡上野町

平民濱口熊嶽代理

中森光雄

一金貳拾圓也

右軍事費補足の趣旨を以て獻金の義被聞届候事

明治三十七年七月廿三日

三重縣知事

從四位勳三等 古莊嘉門印

領收証

一金七拾五圓也

但本院の主意目的を贊成し寄附金

右正に領收仕候也

明治三十七年八月二十一日

高知市外江の口町 高知育兒院印

濱口熊嶽殿

證

一金五圓也

右本會へ御寄附相成正に領收候也

明治三十七年八月二十三日

桑名青年報効會印

濱口熊嶽殿

名譽贊助員ニ推薦候也

明治三十七年八月

三重感化院印

濱口熊嶽殿

領收証

一金拾五圓也

右は海軍々資金として獻金正に領收候也

明治三十七年五月

鳥羽町長 須藤富八郎印

濱口熊嶽殿

領收証

但し第二回、

一金五圓也

右維持費として御寄附成し下され難有正に拜受

仕候也以上

明治三十七年八月十七日

三重縣感化院會計係印

濱口熊嶽殿

領收証

一金貳圓也

明治三十七年八月分

右維持費として御寄附成し下され難有正に拜受

仕候以上

明治三十七年八月一日

三重縣感化院會計係印

濱口熊嶽殿

證

一金貳圓也

右正に領收候也

明治三十七年八月十一日

伊勢實業新聞社社主 田中良三印

濱口熊嶽殿

補助願

三重縣志摩郡鳥羽町

大字鳥羽町

南 文太夫

妻全トノ

右兩名に對し家政補助として爾今月額金壹圓宛
御下附被下度尤も兩名の内何れか死亡之節は該
翌月より半額即金壹圓五拾錢を遺族に御下附補
成度右相願候也

明治三十七年五月二十六日

右 南 文太夫印
眞言宗醍醐派會計執事御中
證

一金參圓也 但家政補助金

右之金御遞送被成下難有拜戴仕候間御禮旁々右落手御報知迄

明治三十七年七月八日

三重縣志摩郡鳥羽町 南 文太夫

濱口熊嶽殿

證

一金參圓也 但家政補助金

右の金毎御送金に預り奉萬謝候儀に受取候間御禮旁々御報知迄

明治三十七年七月三十一日

三重縣志摩郡鳥羽町 南 文太夫

濱口熊嶽殿

濱口熊嶽

一金拾圓也

右軍事費補足の趣旨を以て献金の義被開届候事
明治三十七年十月十二日

福井縣知事

正五位勳四等 阪本鈺之助印

濱口熊嶽

一貳拾圓也

右軍事費補足の趣旨を以て献金の義被開届候事
明治三十七年十月十四日

福井縣知事

正五位勳四等 阪本鈺之助印

濱口熊嶽

一金拾圓也

右軍事費補足の趣旨を以て献金の義被開届候事
明治三十七年十月十八日

福井縣知事

正五位勳四等 阪本鈺之助印

一金拾圓也

濱口熊嶽

右軍事費補足の趣旨を以て献金の義被開届候事

明治三十七年十月十八日

福井縣知事

正五位勳四等 阪本鈺之助印

濱口熊嶽

一金拾五圓也

右軍事費補足の趣旨を以て献金の義被開届候事

明治三十七年十月二十九日

福井縣知事

正五位勳四等 阪本鈺之助印

一金拾圓也

右は本院の旨趣を賛成し御寄贈に相成り正に收納其厚意を謝す

明治三十七年十一月四日

福井縣私立育兒院長主監 穴澤春堂印

濱口熊嶽殿

領收証

一金拾圓也 但小濱町奉公義會寄附金

右悉く領收候也

明治三十七年十一月二十四日

福井縣遠敷郡 小濱町奉公義會印

濱口熊嶽殿

第一〇五號 領收証

一金拾圓也 當支部事業の方へ寄附金

右正に領收候也

日本赤十字社福井支部常務幹事

會計主任 青木秀昇印

明治三十七年十月卅一日

濱口熊嶽殿

領收証

一金拾圓也

右當村出身出征軍人の内貧困者へ寄贈方申出相成候に付領收の上其々配贈取計可申候也

明治三十七年十一月八日

今立郡栗田部村長

宇野甚次郎印

濱口熊嶽殿

証

一五拾圓也

但南條郡出征軍人家族救護方々寄附

右正に受取候也

明治三十七年十一月二日

福井縣 南條郡役所印

濱口熊嶽殿

第貳號 第三回國庫債券應募保証金

領收証書

一金六拾圓也

但申込價格額面百圓に付九拾貳圓の割

右國庫債券額面參千圓の應募証金として正に領

收候也

明治三十七年十月三十一日

日本銀行福井代理店

大和田銀行武生支店

濱口熊嶽殿

領收証

一金貳拾圓也

右正に領收候也

明治三十七年十一月二十三日

福井縣遠敷郡 教育會印

濱口熊嶽殿

感謝狀

一金貳拾圓也

右本會基本金中へ御寄贈相成御厚意の段感謝の至りに堪へず茲に本會を代表し謹て謝辭を呈し候也

明治三十七年十一月二十三日

福井縣遠敷郡教育會長

澤本常治郎印

濱口熊嶽殿

受領証

一金五拾圓也

右者鼻祖神變大菩薩御遠忌寄附正に領收候也

明治三十八年二月一日

一金五十五圓

全 三十九年三月一日

一金二十五圓

全 三十八年七月二十日

一金五十圓

全 三十八年二月廿日

一金六十五圓

全 年十二月一日

一金五十圓

全 三十九年十月三十日

一金十圓

全 四十年十月二十一日

明治卅三年十月廿四日

眞言宗醍醐派大本山三寶院

會計課

濱口熊嶽殿

三重縣知事 有松英義

山口縣知事 渡邊融

高知縣知事 宗像政

福井縣知事 坂本彰之助

全 上

全 上

愛知縣知多郡有松小學校器械代

一金十圓
 全 四十一年一月十三日
 一金參圓
 全 年三月十七日
 一金五圓
 全 四十一年一月廿二日
 一金十五圓
 全 四十一年二月十一日
 一金三十圓
 全 日
 一金十圓
 全 四十一年四月十五日
 一金八圓
 全 四十一年三月四日
 一金五十圓
 全 三月十五日
 一金五圓
 全 五月廿五日

右町長 服部源兵衛

愛知縣瀬戸町深川神社へ

濱松小學校建築費寄附

日本武德會三重縣支部長

有松 英義

豊橋慈善事業へ

全市役所領收

軍人保護院

紀州長島青年會へ

濱松武德會へ

濱江孤兒院へ

一金廿圓
 全 七月九日
 一金廿五圓
 全 七月九日
 一金廿五圓
 全 七月十日
 一金拾圓
 全 七月十日
 一金拾圓
 全 七月十日
 一金拾圓
 全 七月十日
 一金拾圓
 全 八月七日
 一金拾五圓
 全 九月十四日
 一金五拾圓

日本武德會靜岡支部

日本武德會靜岡支部

日本赤十字社靜岡支部

愛國婦人會へ

篤志看護婦會へ

帝國軍人後援會本部

駿河國富士郡吉原町貧民給與

同唯稱寺住職へ寄附

愛國婦人會靜岡支部賀茂郡幹事部長

手足痛
イザリ
腦痛
齒同
イザリ
子齒痛
雨手痛
心臓病
ホク
子宮
子宮
リヨマチ
ペンソク
アザ
眼病
齒痛
脚氣病
横腹
足痛

宇都宮福田町
中川原町
宇都宮市郷町
宇都宮大宮町
同市朝日町
全町下河原町
全市扇町
全市江町
全市池上町
河内郡下横倉
芳賀郡南高根
宇都宮市川向町
宇都宮市四丁目
芳賀郡三橋村
宇都宮市下河原町
東京縣下在郡平塚村小山
東京市雲井通三丁目
三川口三丁目
兵庫席家町
全羽坂通三丁目
神戸中市二丁目

林勘吉 五十一
丸山幸右衛門 五十三
菊池之助 二十一
小島之助 二十一
梶木謙造 五十八
鈴木彦藏 五十八
橋本謙造 三十一
村田ス 三十八
福田セ 三十八
神田萬次郎 不詳
細川源治衛門 三十八
宮下コト 四十七
山口アサノ 四十二
小川アサノ 四十八
信濃伊兵衛 六十九
直江フデ 六十九
北野カユ 六十九
田中宇兵衛 廿二
植上兵衛 廿二
原上忠 廿五
梅崎ミ 三十五

乳不出 肺病 大便不通 テンカン 耳痛 腸痛 全病 眼病 乳不出 足痛 手痛 エントウセン 肺病 足痛 右痛 足痛 齒痛 眼病 全病

赤坂區裏一丁目
本郷區本町三丁目
牛込區大久保町
本所區中瓦町
下在原郡品川村
埼玉縣南埼玉郡櫻井木ヲドマツ
日本橋區橋町三丁目
京橋區船松町
四谷區伊賀町
北豊島郡高田村
深川區龜住町
本所區中之郷本門
淺草區旅籠町
牛込區喜久井町
神田區平長町
北豊島郡下付村
京橋區材木町
埼玉縣北里郡上根村
小石川區駒指町
本郷湯島新花門町

高野 津野 文吉 中津 文吉 神邊 阿ノ 渡邊 太サ 關根 兵衛 櫻井 庄兵衛 前田 昌十 小栗 兼三 中島 兼三 菊倉 兼三 中里 兼三 白井 兼三 猪飼 兼三 金子 兼三 野原 兼三 荒井 兼三 古島 兼三 石川 兼三 藤井 兼三 林井 兼三

足首 痛氣 腰痛 半身不自由 齒痛 全病 眼病 手足シビレ 齒痛 足不自由 痔病 レウマチ 腰痛 痔病 乳不出

京橋區東港町
全區新富町
埼玉縣南葛飾郡山林
全郡全村
荻原郡平井村
麴町區飯田町
下谷區車坂町
全
青山南町
千葉縣安房西崎
小石川區江崎町
荻原郡大井村
北足立郡戸田村
北豊島郡江戸村
本江區元町
青山南町五丁目
牛込區大久保町
全區東五軒町
本郷區本町三丁目

石川 長平 青木 郁藏 酒井 勇作 増田 直次 小池 兵衛 堀江 喜平 齋藤 喜平 鈴木 喜平 森谷 清三 増根 清三 小峯 卯之 安藤 五之 小宮 五之 深野 金庄 中野 金庄 守屋 清三 金原 清三 本田 清三 坂本 清三

ア首病ザ
右足痛
腹旨病
胸痛
足痛
手足痛
眼病
脳病
手足シビレ
全身シビレ
乳不出
右足痛
腹痛
肩痛
首不廻
左足痛
子宮痛
腰痛
全痛

牛込區新小川町
宇都宮市川原町
同一六
豊里村長岡
全村大字カソヤ
宇都宮江之町
全市馬喰町
下谷區仲徒士町
神田區濱田町
淺草區龜岡町
本所區駒込千駄
豊多摩郡中之町
芝區南竹久間町
日本橋區蠣壳町
牛込區寺町
小石川區關口臺町
牛込區宮比町
下谷區長町
下谷區南稻荷町
豊島郡落合村

岡部 廿二
大橋 五十八
伊豆内 六十七
山崎 四十八
金山 五十四
橋本 一十三
川西 五十六
大久保 三十七
青木 元太 十六
高橋 藤吉 四十六
小西 三十九
大名 三十九
十川 三十九
國次 重次 五十九
運見 八十九
荒木 彌作 四十二
米田 八十九
野村 二十九
大谷 德次 六十八
重田 源藏 不詳

胃病
腕不自由
眼胃病
腦痛
全痛
腕痛
胸足痛
脚氣病
右足痛
右眼痛
雙眼痛
右腰痛子宮
セシキ
步行不自由
胃病
雙痛
股痛
足眼病
眼病
兩足痛

小石川區竹早町
本所區北二葉町
豊多摩郡中野町
日本橋區濱田町
全區新材木町
豊多摩郡堀之内
神田區旭町
下谷區二長町
淺草區黒船町
神田區本久右衛門町
神田區三河町
本郷區元黒門町
本所區花町
牛込區辨天町
淺草區壽町
牛込區宮比町
神田區東紺屋町
豊多摩郡淀橋町
全郡中之町
麴町區

岩崎 四十六
大槻 伊之助 四十七
大木 彌吉 三十三
秋本 彌吉 三十三
吉田 彌次 三十四
瀬澤 忠次 五十六
山田 清松 七十一
芳崎 清松 二十七
大野 良六 六十四
齋藤 宇之助 二十二
加藤 宇之助 二十二
並木 宇之助 二十六
多々 爲次 五十七
東場 幸一郎 不詳
田中 秋之助 十九
山岸 秋之助 十九
澤岸 秋之助 十九
加藤 秋之助 十九
小阪 秋之助 十九
袴田 秋之助 十九

心經痛
頭痛心經痛
鳥目胸痛
リヨウマチ
眼星
左手腦
右腕痛
ヒザ痛
心經右足痛
脚氣病
胸下腹痛
咽喉痛
肩痛
腦痛
胃足痛
脚氣病
胃氣病
足痛
手不自由

牛込區新木川町
神田區三河町
北足立郡世野町
淺草區田中三太
京橋區元八丁堀
下谷區南稻荷町
上坂橋町二二七
日本橋區石町
下谷區上野町
日本橋區小傳馬町
神田區佐久間町
淺草區西鳥越町
神田區神樂町
横濱市尼上町
四谷區鮫ヶ橋町
牛込區新小川町
牛込區柳町四
本郷區元町
全二丁目
神田區猿樂町

岩崎亭 一
九山 平
松本 梅
佐々木 吉
小管 太郎
志口 秀次
高橋 三
長谷川 七
後藤 五
酒井 十
齋藤 十一
森下 四
大下 太
磯部 太
小泉 太
松枝 次
大内 助
小野 郎
宮津 郎
池田 藏

兩足シビレ
手足シビレ
リヨウマチ
右足痛
胃腸不出
乳腸不出
横膈腰
肩胸痛
全不出
乳不出
胃病
眼病
胸腹痛
眼星
リヨウマチ
瘧病
全病
子宮病
腰痛
右手痛

神田區錦町
下谷區長者町
神田區表町
麴町區山本町
本所區相生町
本郷區新花町
下谷區箕輪町
小石川區御掃除町
本郷區湯島三組丁
日本橋區河喜町
深川區西彦町
下谷區仲町
神田區三河町
千葉縣本島野町坐村字酒井
淺草區駒形町
本郷區不原町
神田區未廣町
下谷區金杉下町
全區三伏二六
荏原郡大崎村

吉野 四十五
福田 六十六
武内 五十四
黒田 四十
加藤 八十四
金島 三十一
田中 二十七
小川 四十七
板本 五十四
高橋 二十七
山本 三十九
町田 三十五
井上 三十六
小島 十八
秋谷 四十三
増川 四十五
遠藤 五十五
中村 二十六
木村 七十三
澤井 十九

足筋張
乳不出
齒痛
全全
トラホーム
齒痛
ゼン息痛
咽病
足痛
ゼン息
脊隨
食道狹管病
足痛
腰痛
腰病
耳病
胃病
足不自由
腰痛
足痛

神田區八千穗村
播摩加西郡東ヶ坂
播摩加西郡久條町
大和國郡山町
大坂北區網島本宅
淡路澤名郡岩屋町
全郡
北海道札幌區長
下谷區竹町一二
神田區美土代町
赤坂區福吉町
神田區蠟燭町
下谷區二長町
京橋區岡崎町
神田區立大工町
神奈川縣敷藏郡大河川一七四
神田區佐柄木町
神田區岩手町
神田區皆川町
本郷區眞砂町

藤田 重作 十七
中谷 三十九
平田 三十六
北品 不詳
藤田 不詳
岡田 不詳
水原 不詳
對原 不詳
神原 不詳
淺野 不詳
川村 不詳
吉川 不詳
吉野 不詳
佐野 不詳
山崎 不詳
森市 不詳
清水 不詳
飯田 不詳
小瀧 不詳

全全全
綾哥郡土居村
全郡飯野村
仲多度郡南村
綾歌郡坂井手村
全郡宇多津
仲多度郡六合村
綾歌郡土居村
仲多度郡吉原村
香川郡池西村字横井
仲多度郡青木村
全郡多度澤町
三豐郡常磐村大字上田
仲多度郡廣島村大字青木
備後尾之道市鍛冶屋町
全郡豊日町
全郡栗原久保町
全郡久保町新地
全郡三軒家五七
備後御調郡吉和
大阪北區梅田町

肺病
全氣病
リウマチ
半身痛
足痛
眼病
血之道
氣管子炎
リウマチ
眼病
足痛
リウマチ
齒痛
逆上症
耳痛
全全全

西水瀨真栗有丸山高小中花荒阿龜上多馬近佐
安川高田原井山本橋國野房井賀井村々馬藤藤
三峯源榮カ重福い園次鶴源勇き次次山茂和し
郎吉作七ナ七七松そ八郎治三一り郎郎い吉吉か
不詳二十八七十三十八四十七五十三六四十三十四十五十七

足痛病
胞耳痛病
白氣病
脚氣病
手腫物
顏腫物
胃病痛
脚氣病
脊隨病
胃痛病
腹痛病
腮痛病
子宮痛
齒痛病
咽喉病
リヨウマチ
足痛病
胃痛病

日本橋區濱町三ノ四
全區繪物町
本郷區雨門町
下谷區西町一
淺草區三中町七一
牛込區細工町一九
神田區小川町一
神田區松枝町一二
下谷區竹町一二
下谷區徒士町一二
日本橋區蠟燭町
神田區大工町一ノ一
日本橋區青物町
小石川區初音町
赤坂區福吉町
神田區美土代町
小石川區折垣町
下谷區徒歩町
本郷區元町二ノ六六
神田區山柳町

松澤 三十八
關屋 四十三
鈴木 四十四
鈴木 四十七
小澤 四十八
梅本 五十八
杉野 五十九
藤井 六十
影山 六十一
高橋 六十二
青柳 六十三
小林 六十四
小西 六十五
小中 六十六
田中 六十七
山田 六十八
淺野 六十九
朝山 七十
栗田 七十一
山口 七十二
山田 七十三
關五 七十四

足痛病
齒管痛
氣管痛
肩痛病
胸痛病
脊痛病
足痛病
腦痛病
足痛病
女痛病
胸痛病
左眼痛病
咽喉痛病
痲痛病
腰足痛病
ヒ足痛病
中耳炎
脊隨病

神田區松枝町
全區全町
東京北品川本宿
京橋區南靱町
本郷區田町
小石川區水道端
神田區美土代町
牛込區香町一三
全
木挽町一丁目一二
本郷區元町一丁目
本郷四三一九
下谷區御徒歩町
神田區岩本町
神田區南伊賀町
神田區松枝町
牛込區東五軒町
芝區神明町二一
市ヶ谷町七十四番
駿河臺中賀町八

勝井 三十五
勝井 三十七
勝井 三十八
勝井 三十九
勝井 四十
勝井 四十一
勝井 四十二
勝井 四十三
勝井 四十四
勝井 四十五
勝井 四十六
勝井 四十七
勝井 四十八
勝井 四十九
勝井 五十
勝井 五十一
勝井 五十二
勝井 五十三
勝井 五十四
勝井 五十五
勝井 五十六
勝井 五十七
勝井 五十八
勝井 五十九
勝井 六十
勝井 六十一
勝井 六十二
勝井 六十三
勝井 六十四
勝井 六十五
勝井 六十六
勝井 六十七
勝井 六十八
勝井 六十九
勝井 七十
勝井 七十一
勝井 七十二
勝井 七十三
勝井 七十四
勝井 七十五
勝井 七十六
勝井 七十七
勝井 七十八
勝井 七十九
勝井 八十
勝井 八十一
勝井 八十二
勝井 八十三
勝井 八十四
勝井 八十五
勝井 八十六
勝井 八十七
勝井 八十八
勝井 八十九
勝井 九十
勝井 九十一
勝井 九十二
勝井 九十三
勝井 九十四
勝井 九十五
勝井 九十六
勝井 九十七
勝井 九十八
勝井 九十九
勝井 一百

腫物病
兩足痛
手足シビレ
腹痛
眼病
腫物病
ヒザ腹痛
ゼンソク病
眼病
兩足痛
腰足痛
脚氣病
産後血之道
リヨウマチ
胃病
乳不出
腕痛
リヨウマチ
ヒザ痛
リヨウマチ

牛込區樂町
神田區豊町
全區松下島町
四谷區竹町一〇
本所區柳島元町
牛込區矢來町
日本橋區小田原町
小石川區指ヶ谷町
本郷區本郷四丁目
神田區淡路町
小石川區音羽町
小石川區清水谷町
牛込區横寺町
牛込區市ヶ谷之町
不詳
小石川區白山前町
赤坂區青山南町
本郷區ネズ宮町
牛込區津上前町
本郷區春木町

山内 三郎 四十三
村川 三郎 六十八
横山 三郎 二十七
高橋 三郎 二十九
勝倉 三郎 五十五
別所 三郎 二十一
渡邊 三郎 四十四
岡田 三郎 五十二
井上 三郎 六十九
谷川 三郎 十八
北橋 三郎 二十七
高山 三郎 二十七
山田 三郎 二十六
原田 三郎 二十七
木下 三郎 二十七
加藤 三郎 二十七
鴻地 三郎 二十七
小澤 三郎 二十七
白澤 三郎 二十七
井上 三郎 二十七

タンセキ
腰痛
痔病
手不自由
腦病
胃病
足痛
脚氣病
血之道脚氣病
首痛
腰痛
右手痛
手足シビレ
リヨウマチス
左足痛
肩痛
胸痛
腰兩足痛
子宮神經
脚氣病
子宮病

本郷區元町三丁目
牛込區香町一六
四谷區飯町三丁目
淺草區白柳原町
全區桃見町
全
本郷區駒込上富坂
深川區東大工町
日本橋區蠣殻町
牛込區宮比町
神田區錦町
全區東松下町
本郷區田町二七
下谷區御徒歩町
麴町區飯田町
京橋區南靱町
小石川區音羽町
麴町早房町
千葉縣九十九嶋濱村之順賀
小石川區初倉町
小石川區サスカヘ町

山内 三郎 五十四
今木 三郎 五十四
鈴木 三郎 五十四
村老 三郎 五十四
海老 三郎 五十四
武内 三郎 五十四
吉田 三郎 五十四
佐南 三郎 五十四
谷崎 三郎 五十四
田村 三郎 五十四
川口 三郎 五十四
杉浦 三郎 五十四
金子 三郎 五十四
森清 三郎 五十四
山本 三郎 五十四
梅本 三郎 五十四
丸山 三郎 五十四
川島 三郎 五十四
酒井 三郎 五十四
吉田 三郎 五十四

足不自由
胸宮病痛
子宮病痛
脚氣病痛
胸胃痛痛
腰子痛痛
腰子痛痛
肩痛痛痛
腹痛痛痛
頭痛痛痛
乳不痛痛
足氣病痛
脚氣病痛
腰痛痛痛
耳痛痛痛
腰肩痛痛
膝胃病痛

牛込區宮比町
本郷區本郷一丁目
牛込區西五軒町
小石川區音羽町
本郷區駒込坂町
小石川區水道町
小石川區柳町
下谷區御徒士町
本郷區弓町
牛込區築土前町
牛込區新小川町
神田區小川町
本郷區弓町
下谷區龍泉寺町
神田區佐久間町
神田區東松町
全區全町
牛込區北河原町
深川區西六軒堀

山岸 坂之助 二十六
大 林 三十九
小 松 三十九
小 本 三十九
杉 水 三十九
清 屋 三十九
草 本 三十九
山 川 三十九
伊 野 三十九
天 野 三十九
平 野 三十九
高 木 三十九
中 江 三十九
野 月 三十九
柳 田 三十九
宇 井 三十九
横 司 三十九
石 山 三十九
丸 村 三十九
志 吉 三十九

乳不出
胸痛
足痛
半身不隨
左肩病
膝痛
兩足不自由
手足シビレ
左眼痛
左足痛
半足痛
胸痛
腹痛
腕不自由
全身痛
腰痛
胸足痛
頭痛
足不自由

日本橋區大傳馬町
小石川區竹島川
深川區黑江町
麴町區飯田町
日本橋區馬町
小石川區大門町
本所區元町七
牛込區神樂町
神田區黑門町
下谷區中徒歩町
全區上車坂町
小石川區原町
神田區錦町
本郷區弓町
深川區西平野町
神田區三崎町
下谷區竹町
牛込區通善寺町
豐多摩郡伊ノ木
小石川區指ヶ谷町

三 枝 大 次 郎 五十五
增 田 大 次 郎 五十一
高 橋 庄 六十一
田 尻 信 吉 三十八
佐 藤 謙 吉 五十八
瀨 古 利 右 工 門 二十
山 本 七十七
島 崎 八十一
田 中 八十一
染 谷 八十一
小 宮 八十一
柳 川 八十一
宮 部 八十一
天 野 八十一
池 田 八十一
阪 本 八十一
松 村 八十一
藤 倉 八十一
木 内 八十一
吉 田 八十一

左足痛
 リヨウマチス
 横腹痛
 耳遠痛
 腦腰痛
 左腕痛
 胸左足痛
 腰左足痛
 足痛
 腕痛
 全身痛
 リヨウマチス腕痛
 脊骨痛
 頭痛
 足痛
 全足痛
 左足不自由
 全身痛
 手痛
 脚氣病
 日本橋區西河岸
 豊多摩郡中之町
 牛込區袋町
 神田區松下町
 深川區富川町
 千葉縣千葉郡津田沼村
 豊多摩郡中野町
 北豊島郡巢鴨町
 日本橋區龜島町
 神田區下橋通り
 北足立郡木崎村
 神田區元柳原町
 北豊島郡玉子村
 南葛飾郡舟阪
 千葉縣千葉郡槍見川町
 麴町區富士見町
 神田區墨島町
 千葉縣千葉郡幕張町
 全縣全町
 下谷區箕輪町

川手 秀彌 四十七
 關谷 萬彌 三十三
 小寺 五郎 三十三
 石井 五郎 三十三
 三橋 五郎 三十三
 三谷 治郎 三十三
 關原 三郎 三十三
 市原 三郎 三十三
 山田 三郎 三十三
 石野 三郎 三十三
 吉野 三郎 三十三
 佐野 三郎 三十三
 高木 三郎 三十三
 鈴木 三郎 三十三
 高橋 三郎 三十三
 吉平 三郎 三十三
 今村 三郎 三十三
 宮崎 三郎 三十三
 關谷 三郎 三十三

胸病
 腦病
 半身不隨
 腕不自由
 肺病
 肩痛
 口アカズ
 雙脚痛
 脊骨痛
 胸ツカエ
 足痛
 腰腦痛
 腰齒痛
 乳不出
 足不
 口左足痛
 胸及腕
 脚氣病
 腕痛
 脚氣病
 豊多摩郡中之町
 北豊島郡八森町
 全郡瀧野川村
 深川區江町
 神田區三崎町
 豊多摩郡本郷
 本郷區本郷駒込
 淺草區黒舟町
 神田區連雀町
 下谷區八谷町
 小石川區指ヶ谷町
 小石川區音羽町
 北豊島郡長崎
 神田區下白壁町
 下谷區入谷町
 本所區原庭町
 北豊島郡下村
 南足立郡北千住
 全郡南千住町
 北豊島郡岩測町

飯塚 五十五
 岩瀬 五
 小泉 五
 田中 五
 木間 五
 秋本 五
 米田 五
 大野 五
 筒井 五
 中井 五
 大村 五
 大島 五
 大川 五
 大川 五
 中川 五
 水野 五
 富岡 五
 荒川 五
 山崎 五
 稻垣 五
 飯塚 五十五
 岩瀬 五
 小泉 五
 田中 五
 木間 五
 秋本 五
 米田 五
 大野 五
 筒井 五
 中井 五
 大村 五
 大島 五
 大川 五
 大川 五
 中川 五
 水野 五
 富岡 五
 荒川 五
 山崎 五
 稻垣 五

足シビレ
耳遠シ
左手痛
リヨウマチ足痛
胃 病
リヨウマチ
覺 傷
胃 傷
心 臟
リヨウマチ
リヨウマチ
脚 氣
コシ痛
コシ痛
リヨウマチ
足 痛
手 不自
足 痛
頭 痛

本郷區天神町
小石川區表町
本所區青塙町
日本橋區吳服町
本郷區春木町
千葉縣東葛飾郡浦安村
全縣千葉郡幕張町
埼玉縣北足郡河口村
本郷區根津會垣町
淺草區北法町
豊多摩郡内藤新宿
豊島郡高原本村
小石川區音羽町
東葛飾郡浦安
全
南葛飾郡德丸村
東葛飾郡浦安村
全
神田區新石町
東葛飾郡浦安

木村 文平 四十
石川 幸三 六十三
高村 幸助 六十七
加藤 太郎 四十三
田中 次郎 五十二
福田 定吉 五十八
相原 周次 五十四
長谷川 次郎 五十四
小川 林藏 五十二
貝原 トシユ 五十一
齋藤 五十一
波田 太郎 三十一
小島 榮吉 二十九
熊川 増次郎 十八
宇都川 大次郎 十六
久美 登作 十六
内田 菊次郎 十六
大津 賀喜 十五
加藤 源次郎 十五
熊川 源次郎 十六

全身シビレ
胸 痛
腹 痛
胃 腸 病
リヨウマチ
脚 氣 病
脊 氣 隨
脚 氣 病
盲 氣 目
胃 脚 氣
痔 足 痛
全 身 痛
足 痛
セシキ痛
左足スバク
眼 病
腰 痛
肩 切 痛
手足シビレ
手足不自

下谷區西町
全區竹町
神田區神保町
日本橋區本町
小石川區御掃除町
日本橋區本石町
麴町區麴町
深川區古名場町
南千住字三之輪
豊多摩郡中立町
北足立郡河村
南葛飾郡笠井村
赤阪區赤阪町
芝區愛宕下町
下谷區谷中眞島
豊多摩郡杉波村
千葉郡葛張村
南葛飾郡笠井村
本所區番馬町
豊島郡練間技

鈴木 又六 十七
立岡 長兵衛 十九
山間 五兵衛 十六
新島 福次郎 十五
福島 福四郎 十三
野口 都四郎 十三
前川 眞八郎 十三
大星 眞吉 十三
相川 源藏 十六
今井 正二 十九
增田 正二 十九
志村 勘次郎 十九
小山 野田 勘次郎 十九
小野 杉藏 十九
林 善之助 十九
蕪山 善次郎 十九
市原 甚五郎 十九
渡邊 平次郎 十八
藤野 米太郎 十八
川島 太郎 十八

手及指不自由
シメチチ及左右足痛
脚氣足痛
コシ痛
足筋ツリ
眼ノ星
胃病
コシ病
全痛
腹痛
腕及足ノ痛
足コシ痛
足筋ツリ
リヨウマチ
疝氣及コシ痛
尻腫痛
脚氣病
センキノボセ耳
足不自由
センキコシ

芝區二羽町
全西ノ久保八幡町
南葛飾郡大極寺
麻布區斧町
南葛飾郡八右衛門町
深川區相石薬町
京橋區入船町
同區新宮町
千葉郡幕張町
下谷區南谷町
南葛飾郡平井村
南山南町貳丁目
京橋區鐵砲津
麻布區山本町
京橋區靈岸島
全區小旗町
本所區林町一丁目
牛込區岩戸町
南葛飾郡下玉島町
淺草區向柳原町

笠井音五郎	山田藤次郎	坂田千金次郎	清水啓次郎	島村啓次郎	小山林ハ	西山イ	石山ツ	後山ル	山田次郎	朝岡鶴吉郎	吉川ミ	猪橋エ	宮崎ハ	大島フ	鈴木ヒ	白谷鐵五郎	桑名梅吉郎	佐藤松太郎	鈴木音次郎	
五十三	十一	四十七	四十三	十	廿九	四十九	二十九	四十八	六十	十二	五十三	五十九	十五	十六	二十一	二十三	三十	四十五	三十一	二十八

右之足痛
胃胸痛
脚氣
イザリ
胸右肩痛
コシ痛
全痛
右腕痛
右腕痛
脚氣病
健忘症
リヨウマチス
足痛
胸腦脚氣
右脇下痛
コシ痛
脚氣足痛
コシ痛
センソク
浮齒痛

京橋區築島
牛込區北町
麻布區霞町
深川區石島町
日本橋區新右衛門町
芝區田村町
東葛飾郡葛西村
日本橋區濱町
芝區田村町
芝區西久之廣町
本所區北新町
京橋區木挽町
本所區眞坂町
南葛飾郡笠井村
神田區松住町
荏原郡ヒブスマ村
全郡中野町
本鄉區金助町
芝區二羽町

鈴木新三郎	小林常五郎	竹川傳五郎	長谷川傳五郎	岩田カイ	小山林カ	横山音次郎	關山浦次郎	林喜佐次郎	新井安兵衛次郎	宮内万藏	江尻サ	西村文四郎	高橋源四郎	野崎貞五郎	西野真五郎	松田ミ	井田ハ	厚浦サ	石井長次郎	鈴木音次郎
二十八	三十一	三十一	三十八	三十六	五十八	二十四	十九	六十一	六十六	三十二	二十六	二十二	四十二	四十三	五十八	六十八	二十二	廿四	三十八	四十九

息肩肩
切痛痛
コイクルイ
眼病
足不自出
半身病
腦コシ
リヨウマチ
全コシ
全コシ
全コシ
手クビ痛
足不自出
半身病
全コシ
左足痛
足痛

下大島町
日本橋區龜島町
神田區錦町
下谷區御徒士町
下足立郡ケキ保村
淺草區羽芝町
下谷區南大川町
日本橋區魚島町
赤坂區檜町
日本橋區龜島町
京橋區本港町
淺草區北三ッ筋町
麻布區本町
神田區御崎町
淺草區小島町
小石川區掃除町
南葛飾郡平井
麴町區飯田町
本所區北井田町
芝區三田町
美戸島町

石田 利俊 五十六
伊藤 田 一
弓田 源 四十四
福井 源 四十四
清水 源 四十四
關根 源 四十四
深井 源 四十四
中山 源 四十四
藤井 源 四十四
中井 源 四十四
藤原 源 四十四
中山 源 四十四
高松 源 四十四
高橋 源 四十四
市橋 源 四十四
柳澤 源 四十四
奧村 源 四十四
島村 源 四十四
赤坂 源 四十四
杉本 源 四十四
米山 源 四十四
木嶋 源 四十四

乳全コ
シ不病出
齒痛
耳痛
手痛
胃痛
コシ
眼病
脊痛
足痛
心臟病
脚氣病
肩及下腹傷
足傷
全氣病
疝氣病
手痛
雙足痛

南葛飾郡水帆村
京橋區神津島町
日本橋區龜島町
南葛飾郡本平井村
深川區諸町
淺草區馬道七丁目
麻布區櫻田町
芝區片門前町
日本橋區龜島町
南葛飾市平井
日本橋區枯島町
南葛飾郡葛西村
北豐島郡坂橋村
南葛飾郡平井村
深川區大嶋町
深川區冬木町
麻布區甲貝町
日本橋區小傳馬町
南葛飾郡平井
芝區田村町

足田 虎 三十八
中村 小 三十三
岩崎 小 三十三
横野 吉 三十三
菊池 喜 三十三
海老原 佐兵衛 三十三
後藤 久 三十三
川端 善 三十三
富井 甚 三十三
鈴木 藤 三十三
間瀬 二 三十三
野崎 多 三十三
折原 多 三十三
深野 多 三十三
島田 源 三十三
山谷 久 三十三
山田 兵 三十三
鈴木 兵 三十三
島田 兵 三十三
坂島 兵 三十三

足 痛 疝 氣 痛 腕 痛 手 痛 全 痛
リヨウマチ
コ シ 痛
腕 痛
コ シ 痛
腦 痛
腹 痛
コ シ 痛
腦 痛
胃 病
足 痛
言語不自由
脚 氣
齒 痛
胃 腸 痛

千住中組八六九
千住中組
本所區御處町
青山北町三丁目
豊多摩郡江戸橋
芝區片門前町
淺草區四ッ谷筋町
本所區新花町
日本橋區内松町
牛込區北山伏町
淀橋町
南葛飾市鹿本村
本所區中ノ郷竹町
山口縣玖河郡鳴門村
全縣吉敷郡佐山村
和歌山市上ノ町三丁目
和歌山縣海草郡西佐和村八軒屋
全縣北大工町
大和添上郡法華寺
福井縣坂井郡磯部村

近 藤 米 吉 六十四
井 上 定 次 郎 二十六
鳴 川 伊 之 吉 三十六
長 谷 川 伊 之 吉 三十五
齋 藤 喜 七 二十九
川 靜 喜 七 二十九
橋 本 喜 七 二十九
田 中 フ 七 二十九
佐 々 木 又 平 六十二
高 橋 カ 又 平 六十二
秋 山 佐 市 二十一
畠 村 サ 市 二十一
倉 村 モ 七
奧 邑 子 廿八
眞 銷 孝 四 廿九
池 田 傳 次 郎 四十六
松 尾 キ 七 五十九
栗 本 淺 枝 十八
内 山 ヲ 枝 十八
吉 澤 廣 施 二十一

足 裏 患
リヨウマチ
ノ ド
腰 痛
胃 腸 痛
リヨウマチ
全 痛
手 痛
足 痛
セ キ
セ キ
リヨウマチ
全 痛
タムシ
發 狂
シ ビ
乳 痛
齒 痛
眼 カスミ
右 カイナ痛
右 手 シビレ不自由

福井市東上ノ町八十貳番地
知多郡内海町岡野
全郡全町中ノ郷
全郡中津町
全郡内海町
三重縣安濃郡東世村
愛知縣知多郡常滑村
全郡全町字關
全郡全町損豆志木熊野
全郡城岩町
全郡半田町
全 痛
全郡安飯村
全郡龜崎町
全郡半田町
全郡城岩町
全縣碧淺郡高須町
奈良縣片智郡五條町字二見村
全上
全縣全郡五條町

山 本 ヲ シ 五十三
大 岩 秋 次 郎 三十三
今 田 秋 次 郎 三十三
廣 賀 定 吉 十三
林 井 佐 七
中 井 芳 太 郎 四十三
岩 川 芳 太 郎 四十三
水 海 上 源 ノ 助 二十
中 野 庄 太 郎 六十三
伊 藤 庄 太 郎 六十三
佐 野 利 七 五十五
山 崎 利 七 五十五
名 木 野 吉 太 郎 四十一
伊 藤 令 次 郎 三十一
木 村 ト 三十一
小 栗 清 三十一
藤 浦 ヒ 三十一
西 山 ナ ヒ 三十一
松 本 ヲ ナ ヒ 三十一
酒 井 龜 太 郎 六十一

白ム耳手齒手ム足腰全
 毛子痛子痛
 リヨウマチ
 胃足手腕眼痛全足
 痛痛痛病氣痛

口虫ノアゲ
 郡内藤岡村
 舉田町字前木
 全
 東春日井郡瀬戸町
 東春日井郡瀬戸町
 全
 全郡瀬戸町
 全
 三河國八名郡黒津
 豊橋市花田巳
 八名郡町追津町
 八名郡錦瀬村
 額田郡牟呂村
 豊橋市花町
 豊橋市橋町
 八名郡長藤村
 豊川町
 遠州濱松町元町
 濱名郡助吉村
 全郡勇村

鈴金尾篠松岡市米三高河中加加辻松加國鈴黒
 木澤崎原井田山谷山橋井村藤藤原藤野木坂
 長やか順さ三き淺タハ廣太四彌ツ二まし重
 次えよ平き郎み次ヶッ治郎郎藏キカ郎つげ次
 三十一七十五三十七六十五二七十三七五
 三十二七十一十五三十七六十五二七十三七五

鼻眼疝頭腰逆全全足手足
 目病氣痛痛上痛痛痛
 ヲヨウマチ
 口中痛腰
 齒痛氣コシ
 齒痛痛痛
 腹足百眼
 痛痛痛痛風病

幡豆郡吉田村宮崎
 全郡萩原村
 全郡一色村一色
 全
 知多郡有機町相場
 碧海郡藤松村字坂井
 智多郡旭村
 額田郡下山村
 岡崎町
 全町中村町
 全町魚町
 額田郡廣畑町
 智田郡岡崎町停車場前
 全
 全郡木和村羽根
 額田郡中山村字多金
 西加藤郡舉田町
 全
 全町字大橋
 郡内藤岡村

作市岡前鈴米柴柴酒岩石柴峯石坂管稻金石筒
 々ノ嶋濱木坂田田井井井井井井井井井井井井井井井井
 木瀬次げせ春孝ま寅金ヤ郎次郎のしあ太辰
 げ勇郎んん吉吉き隆夫作エ吉郎吉しのをを郎枝
 十七十九六十八九十九十十一十二十三十四十五十六十七十八十九
 七十九六十八九十九十十一十二十三十四十五十六十七十八十九

疥乳舌肺
 病 痛 炎 痛
 リヨウマチ足
 胃 同 足 胸 齒
 痛 痛 元 元
 リヨウマチ
 胸 齒 全
 元 元 元
 リヨウマチ

小笠郡佐塚村高瀬
 全郡掛川町二藤町
 全郡中西村金井場
 全郡掛川町中町
 全郡大坂村
 小笠郡大池村
 掛川町十九首
 小笠郡栗木村初馬
 掛川町北門
 掛川町西町
 小笠郡中村
 岩田郡上淺場村
 小笠郡平田村下平川
 掛川町肴町
 小笠郡土方村土方
 全郡西樽地村
 全郡山口村楠川
 小笠郡伊達方村
 全郡會我村原野
 全郡會見村

宇藤 山 高 橋 下 間 桂 二 さ や
 中 山 利 太 郎 五 十 七
 廣 岡 平 助 五 十 九
 大 月 平 五 十 九
 志 村 七 十 四
 柴 根 武 十 九
 中 本 武 十 九
 松 本 武 十 九
 岡 本 武 十 九
 熊 本 武 十 九
 卷 野 多 十 八
 黒 田 源 五 十 五
 松 井 勘 七 十 六
 藤 田 七 十 七
 伊 勢 政 四 十 八
 鷹 山 政 四 十 八
 鈴 木 政 四 十 六
 大 場 政 四 十 六
 杉 村 政 四 十 一

左 腦 齒 足 乳
 眼 病 病 病
 リヨウマチ
 腦 腰 ム 頭 耳 胃 口 胃 痔 眼
 病 病 病 痛 痛 病 病 星
 中 病 病 病 痛 痛 痛 痛 痛

濱松町藏町
 濱名郡勇村
 全
 濱松町八幡地
 濱松町新聞社員ノ子供
 全町鍛冶町
 濱名郡下瀬
 全
 磐田郡中泉町
 全郡魚町
 濱名郡天神町
 全郡白和
 全郡舞坂
 濱松町法學館内
 濱名郡北庄内村
 全郡田尻
 小笠郡樽木村
 全郡大池村
 磐田郡久努村
 全

尾 木 鈴 名 伊 松 山 天 清 水 若 種 森 笠 寺 松 中 不 山 高
 崎 野 木 倉 東 尾 田 野 水 谷 本 千 井 田 嶋 村 間 下 橋
 か 吉 敏 實 ら 虎 一 み た 五 た 五 せ せ せ 順 清 二 さ や
 ね 藏 夫 次 く 吉 夫 ち ま 郎 け 郎 き つ と 一 八 郎 い ぬ
 四 二 十 廿 十 廿 四 五 卅 五 卅 不 廿 一 八 郎 廿 廿 五 六 七
 十 九 四 四 九 四 七 四 七 七 明 六 四 四 二 十 十 七

リヨウマチ	耳	胃	胃	足	全	手	息	口	耳	眼	胃	神	腦	腕	心	胃	足	腰
		頭	頭				切	熱	ン	病	病	病	病	シヒレ	經	頭	痛	ケド
		通								病	病	病	病					
										全郡青島村	志太郡藤枝町白子	藤枝町白子	稻葉村瀬戸	志太郡前島	志太郡	志太郡朝比奈村	志太郡中ノ郷	志太郡時ヶ谷村
										葉梨村								志太郡活ホ
										下川根村								
										高須村								
										下川根村								
										藤枝下傳馬町								
										時ヶ谷村								
										青島村								
										時ヶ谷村								
										志太郡								
										志太郡青島村								

伊藤	栗田	増田	山内	戸塚	桑原	原木	潛崎	諸田	杉森	西村	中山	山田	小森	中山	秋山	増田	神邊
藤久	田久	田久	内久	塚松	原松	木松	崎松	田松	森松	村松	山松	田松	森松	山松	山松	田松	邊松
セ	テ	テ	サ	左衛	錠	ヨ	周	豫	キ	ト	サ	カ	タ	ヒ	雄	菊	テ
キ	郎	ッ	ダ	門	八	シ	助	平	ミ	セ	ダ	ッ	郎	ッ	サ	作	イ
三十五	九	五十一	五十三	廿四	十	五十一	六十八	卅一	十四	六十四	卅四	卅三	五十三	五十三	五十九	二十二	四十一

肩	腦	胸	眼	胃	心	全	全	全	齒	心	リ	乳	齒	痲	齒	痲	全	手
手	シ	痛	病	病	病	經			病	臟	チ	不	痛	痛	痛	病	痛	痛
シ	ヒ	ン	ン	ン	ン	ン			ン	ン	ン	ン	ン	ン	ン	ン	ン	ン
志太郡鷹津村郡	志太郡静濱村宗高	全郡宗ノ嶋	志太郡藤枝町	全	志太郡嶋田町	不明	志太郡金谷町	志太郡細島村六九	全郡大長村	全郡川野村丹野	小笠郡池壽田村	全	駿河國島田町向屋	小笠郡倉貝村	志太郡藤枝町	小笠郡東山口村	志太郡島田町	小笠郡南山村
																		掛川町連省

山内	増田	影山	石川	福井	水野	横山	榛井	永坂	森廉	長島	伊藤	渡邊	杉本	古木	大野	白野	松本	熊江
中	田	山	川	井	野	山	井	坂	廉	島	藤	邊	本	木	野	野	本	江
ヒ	友	清	仙	右衛	菊	政	清	清	廉	島	ト	ト	ト	ト	ト	ト	ト	ト
サ	十	一	吉	門	郎	ト	治	藏	藏	績	夕	わ	く	ヒ	郎	平	吉	キ
五十三	二十一	四十七	四十七	四十七	七十一	七十一	七十七	七十七	三十九	七十九	五十一	二十八	六十七	四十七	四十七	三	五十八	六十

稟告

(各地にて廻し
たる稟告寫し)

各地新聞紙上に其雷名を轟し皆諸君の確信する當時天下無比の施術者濱口熊嶽師今回當地有志諸君の御招きに依り諸病患者のため左記の場所に於て施術の求めに應ず諸病患者は來りて其効驗を受られよ

施術の効驗如何?

師の命令
數回受るとも斷全効能なきもの澤山あり
少し効驗あるものあり
其の場にて効力を現はすものもあり
其他全部平癒するものあり

不信の者は來るに不及

右承知有之度

但し官公吏並に貧者は無料
一生活二代の施術料金貳拾五錢

毎日 午前七時より 十一時迄 受付一日二百人限り (法師内則に依り市は二百五十人とす)

施術所 三重縣紀伊國長島町 (但本部)

濱口熊嶽事務所執事

濱口熊嶽内則

第一章 施術の目的

第一條 施術は世人の信する心理的秘術の力を以て専ら諸病者を平癒ならしめむとするにあり

第二條 封病令札は持續する難病者に再發を防ぐ爲め別に令札を與ふ

第二章 施術の心得

第三條 施術者に對しては丁寧心切を旨とし野鄙ある言語を用はずして態度を保ち以て應接すること

第四條 施術中には被術者に對して左の各項を遵守せしむること

一、喫煙を禁ず

二、濫りに飯食するを禁ず

三、帽子其他冠物を脱ぐこと

四、満場靜かになさしむること

五、立見させず座につかしむること

六、雑話せしめざること

七、施術所の防害被術者の邪魔等を為す者なら様注意すること

八、被術者は順番札の順底に依り術師の前に靜かに至る様に示し置くこと

第五條 施術は一日貳百人に限り時間は午前六時より正午迄とす但時宜により術師の命により増減伸縮することあるべし

第六條 施術を乞ふ被術者にして施術料を喜捨する者を傾置し濫りに術施料を請求せず

第七條 官公吏の外特に施術を實地研究せむと

望む者ある時は住所氏名年齢職業を聞き術師に通じ其承諾を得て許可す

第三章 順番券及び施術料収納方の心得

第八條 公衆施術順番券の種類左に

- 一、普通順番券（普通被術者に與ふる者）
- 二、赤特別毎日券（一回施術を與ふるも其効驗の有無覺へざる難病者に與ふる者）
- 三、青 隔日券（施術の如何に依り施術隔日とす）
- 四、官公吏施術券（熊嶽内手帳則第二條に依り施術す）
- 五、普通無料券（施術の如何に依り無料とす但し手数料を要す）
- 六、最特別施術券（此券は有位知名の人士より紹介ありたる時に與ふる者とす）

七、貧者施行券（貧者と認むる者に與ふ）

八、特別招待券

此券は内則第四章第十一條に依り招待に應ずる時の券とす

九、最特別招待券

此券は有位知名の人士より招待ありたる時術師の意見を聞き其承諾を得て通知券を交付すべし

第九條 施術を乞ふ者前條の券状なき時は施術を與へず

第十條 學校生徒及び官公吏其他出勤者者は術師は特別を以て朝五時より六時迄施術する事あるべし

第十一條 術師は病氣の如何に依り施術料返金の通告をなし施術を謝絶することあるべし其場合には受附に至り料金を受取るべし

第十二條 寫眞にして施術を受ける事を得但し受付に至り其順序を尋ぬる事

第十三條 施術料は普通順番券を附與するときは第二章第六條に照らし施術料喜捨を受くべし

第四章 特別招待に應ずる心得

第十六條 一病者の爲め招待を受ける場合は術師及び隨行者の旅費は招待者の負擔とし其旨被術者へ示し置くこと

第十七條 内則第三章十に依り有位知名の人士より招待ありたる場合は術師の意見を聞き特別を以て招待の求めに應ず

但し旅費は請求すべからず施術料招待者の心持とす

第十八條 市町村にして數人以上共同招聘を求

められたる場合は便宜協議の上其求めに應ずることあるべし

第五章 雜 則

第十九條 公衆の中にして施術を受けるを得る事情ある病者は時宜に依り特に自宅に於て施術を行ふ事あるべし

第二十條 施術を乞ふ者施術を受ける爲め醫藥を履せざる様且可成醫師診斷證明書携帯せらる、様注意す可し

第二十一條 被術者は特別希望ある場合は秘術研究會開設の求めに應ずる事あるべし

第二十二條 風俗を亂すべからず亂せしきには施術を與へず

第廿三條 被病者満員を経過したる時は臨時引替券を發給する事あるべし

第廿四條 施術料は全國通じて一致す但し本所の會議に依り増減する事あるべし術師と云と雖ども會議の上にあらざれば之を獨斷に左右することを得ず

第廿五條 熊嶽師手帳内則五條に依り外國人は特に規定あり

第廿六條 執事及び書生には本所より特に免狀を渡しあり故に之を所持せざる者は被術者を取扱ふを得ず

第廿七條 各部長を以て評議を爲し内規を變更することあるべし其際に於ては評議員長提出したる事項を術師に通じ其承諾を得て決定するものとす但し評議員長は執事總長以

下各部長又は委員より之を撰定す
第廿八條 以上協議の上相定むる者なり故に術師と雖も猥りに變更するを得ず

會計部 執事部
弟子部 書生部
郵便係部

右之各部に有るべし
月給等は會計部に於て之を定む

明治三十九年一月評定

濱口熊嶽事務所

注 意

術師内則第三章第八條に依り順番券公衆施術料收納方心得の種類左に

一 普通順番券 (此券貳拾五錢) 此券二百枚に限る

二 赤特別毎日券 (全上二拾錢) 但一週 (一回施術は與ふるも其效驗有) (無覺へざる難病者に與ふる者)

三 青隔日券 (全上拾錢) 但一週 (術師施術の如何に依り施術隔) (日とす)

四 官公吏施術券 (熊嶽術師内則に依り無) (料施術す)

五 普通無料券 (施術料無料但一週間以) (内手數料金五錢)

六 最特別券 (此券は有位知名の人士より紹介) (ありたる時與ふる券 但し料金は) (心持とす)

七 貧者施術券 (無料 施術す) (貳拾枚發布隔日とす)

八 特別招待券 (一里以内は參圓とす但第四章第十六條による)

九 最特別招待券 (此券は有位知名の人士より招待) (ありたる時術師の意見を聞き其) (承諾を得て通知券を交付すべし)

第十條 學校生徒及官公吏其他出勤す者は特別を以て朝五時より六時迄施

術執行する事あるべし

第拾壹條

術師は病氣の如何により施術料返金の通告をなし施術謝絶することあるべし

し其他場合には受附に來て料金受取て返るべし

第拾貳條

寫眞にして施術を受くる事を得 但し受附に來て其順序を尋ねる事

術師内則第四章 抜書

第拾八條

市町村にして數人以上共同招聘を求められたる場合は便宜協議の上其求に應ずることあるべし

術師内則第五章 抜書

第廿三條

受術者滿員を經過したる時は臨時引替券を發附する事あるべし

右評議之上相定候

濱口熊嶽事務所執事

受附時間は朝六時より十一時迄午後施術致すときは十二時より三時までとす時間は確守すべし

江湖諸君に警告す

世に惡漢あり濱口熊嶽師と詐稱し患者より多額の金員を受領し迷惑を感じしむると屢々あり其の一例を擧げ以て毒手に罹らざる様御注意仕候

調官「其の方は住所を言へ」

渡邊「はい私は廣島縣廣島市猿樂やぐら町の者です」

調官「其の方は熊嶽其の人を知れるか」

渡邊「私は更に其の人を知りません」

調官「其方は熊嶽の家内の實家を知れるか」

渡邊「紀伊國長島町西濱なる東より西向なる熊嶽の實家に一泊す」

家内と證明すべきものは長松とてつなり其の内長松は四十二三歳てつは十八九歳なり

彼の熊嶽あるものとは全く文際したる事なし又本人は知らぬ自分の宿りたる室は表にて左側なり

調官「てつは其の時十八九歳なれば今頃三十歳なり然るに卅一歳になる熊嶽と云ふ子があるか」と叱る

渡邊「てつは其の時 四十二歳あり宿りたるときは庭に拾八位の女が二歳位の兒を拘き居り又てつの十八九歳と言ひたるは間違にて名を知らざる拾八九の娘居りたり此の三人の内娘は家内あるや否や斗り知らず然れども長松てつの二人は實家族と云ふことを確認せり」

調官「然らば汝は熊嶽其の人を知れるか」

渡邊「私は更らに其の人を知りません」

調官「其の方の住所を言へ」

渡邊「はい私は廣島縣廣島市猿樂ヤグラ町の者です」

大峰山中先達眞言宗行者大阪どんごろ大師方及諸にして外丸秀長とも申して詐偽をしました

明治四十一年十月十五日印刷
明治四十一年十月二十日發行

定價全十拾錢

編輯兼發行者

靜岡縣靜岡市西區西一丁目一〇番地
小長谷勝之助

印刷者

靜岡縣靜岡市西區西一丁目一〇番地
石原愼平

印刷所

靜岡縣靜岡市西區西一丁目一〇番地
靜岡印刷株式會社

明治四十一年十月十五日印刷
明治四十一年十月二十日發行

定價金七拾錢

編輯兼發行者

小長谷勝之助

靜岡縣靜岡市濠匠町三丁目三十一番地

印刷者

石原慎平

靜岡縣靜岡市四番町三十六番地

印刷所

靜岡印刷株式會社

靜岡縣靜岡市追手町百番地

257
655

